

『番人田吉蝦夷記 全』翻刻と解説―二

高橋由彦
花輪陽平
藤村久和

一 はじめに

本稿は「『番人田吉蝦夷記 全』翻刻と解説―一」（『國學院大學北海道短期大学部紀要』第三十一巻 平成26年3月刊）に続くもので、『番人田吉蝦夷記 全』の序文の後半部を翻刻・解説している。

前稿で記した「翻刻に当って」「体裁について」は省略し、「凡例」を再掲し利用者の便を図った。

二 凡例

翻刻に当っては、記載、未記載、欠丁した頁にも通し番号を打ち、記載文はコピーをして紀要頁の上段に載せ、下段には、各行の頭に番号をつけ、変体仮名混じりの本文を、書いた手順のままに起こすこととした。従って、旧字や訂正の重ね文字、推敲の段階で付け加えたもの

も、そのままに書き、判読不能な箇所□を、読めたとしても不用の文字として消した箇所などには、下辺にアンダーラインをつけてそれを明示した。また、読み易さと読み違いをしないために、適宜句読点を付した。更に、圓吉の記述には他書に見られない漢字が多いため、出来るだけ近い漢字を登用するか、作りが複雑な場合は、それを「□」とし、註でつくりを説明することにした。

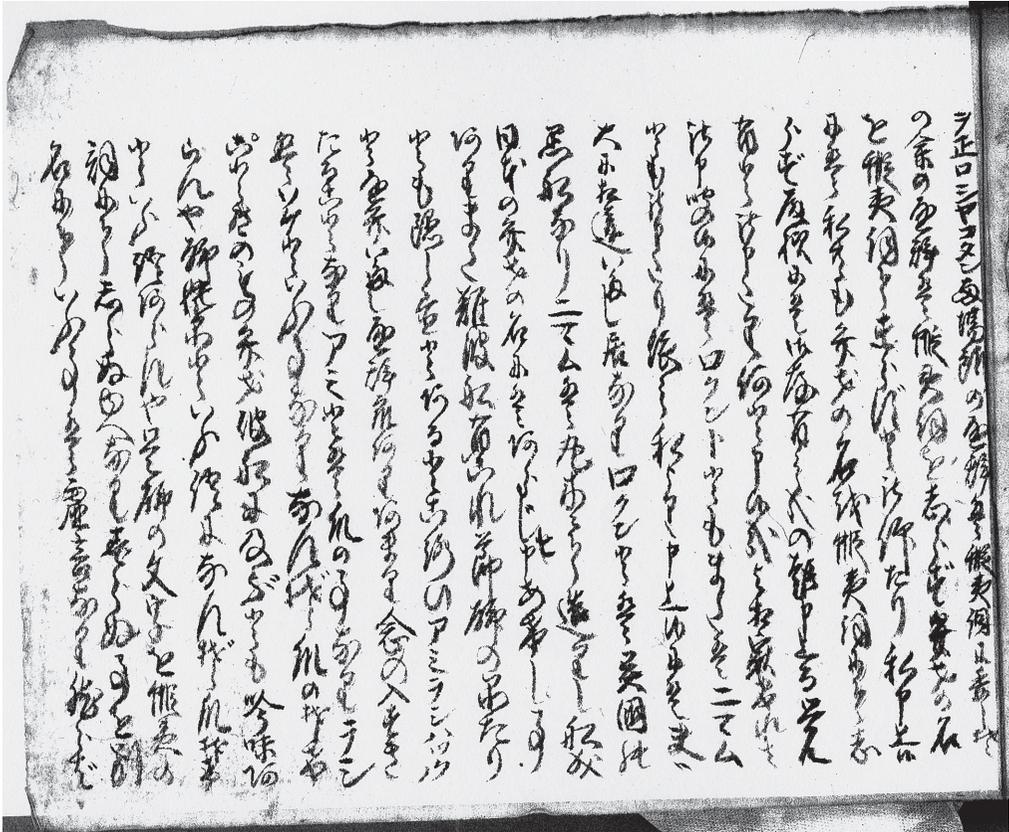
四の読みと注釈には、今様の読みを仮名で綴ることにした。それは、古文書の書き癖として、本文に不必要な濁点や、半濁点がつけられているのとは逆に、必要な部位に送り仮名を欠くほかに、圓吉特有の松前訛りが随所に見られるからである。たとえば、「し」と「す」の書き直し、「い」、「ひ」、「え」、「へ」の使い方の混同がそれである。したがって、その差異は、煩雑を避けて後半に文中の註と共に一括して纏めたため、それぞれの頁と行の番号を見合わせて参照されることをご了承願いたい。また、文字の読み方が、幾様にもある場合、実際に圓吉の読みが分からないため、統一的に表記し、別様の読みは註に譲ることにした。

和国与里出し毛のへ、手前勝手の名越
 付る由へ、阿やま里詞もおふかる遍し。
 たる登へ者、鍾の名越せ以連ん、本登いふ可
 古登し。跡先、か称丹天、中の竹奈る物
 盤させる奈里。せ以連以ん本者、シヤ□リ、モンベ
 ツ、楚の外、子モロ辺の女土人の持、サピタ
 登いふ木の枝丹天造り、た者こ吞器
 盤、せ以連ん本奈る遍し。木越火丹炎
 里し略語奈れ者奈里。ま多、クスリ
 遍んの女土人とも所持の品盤、長サ三尺余
 も阿里。古れ盤ま多、ホウ登盤いへ
 か多かる遍し。
 西蝦夷地シヤコタン与里、濱マシケ追、石狩調役
 持能節奈里。幕府のラムシヤ申渡の書付へ、
 蝦夷詞丹天、脇書い多左せ侯事阿里。楚れ越
 見る丹、日の丸、中黒の御印立侯弁、左以登
 阿る処ひ、ヲシヨロの通辞盤、弁才をニママ登、
 書天阿里。シヤコタンの通辞盤、弁才を口
 クント登書天阿る。有時丹、調役申間丹盤、

三 影印（上段）・翻刻文（下段）

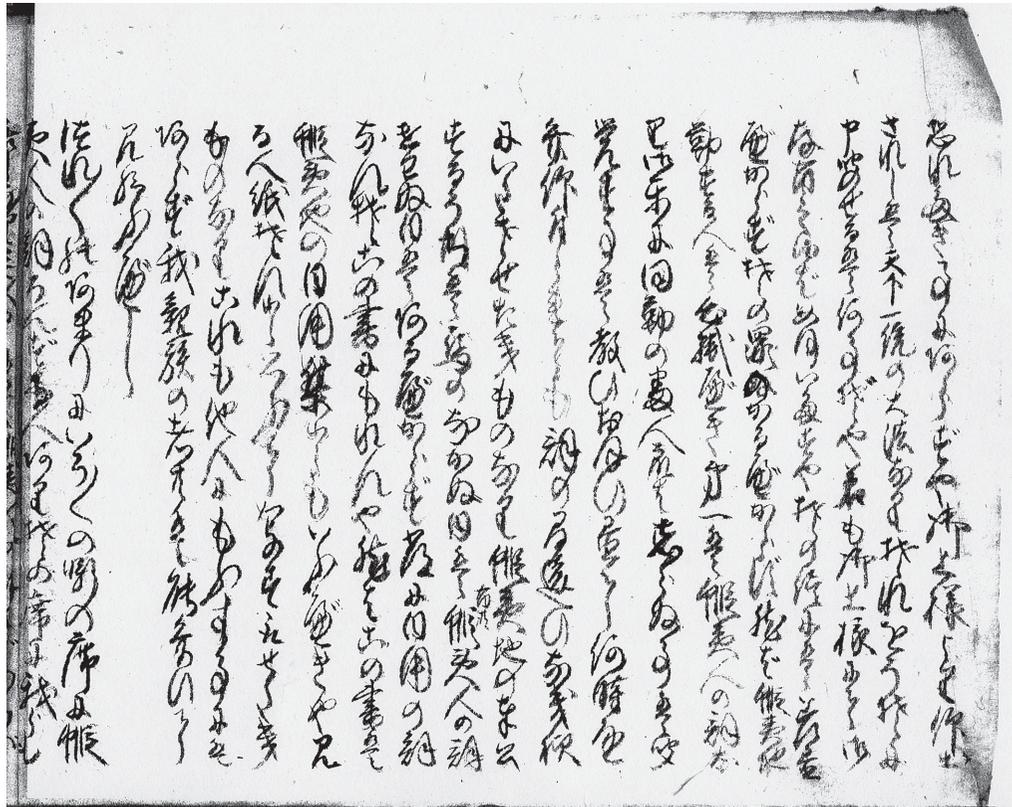
【026】

- 1 和国与里出し毛のへ、手前勝手の名越
- 2 付る由へ、阿やま里詞もおふかる遍し。
- 3 たる登へ者、鍾の名越せ以連ん、本登いふ可
- 4 古登し。跡先、か称丹天、中の竹奈る物
- 5 盤させる奈里。せ以連以ん本者、シヤ□リ、モンベ
- 6 ツ、楚の外、子モロ辺の女土人の持、サピタ
- 7 登いふ木の枝丹天造り、た者こ吞器
- 8 盤、せ以連ん本奈る遍し。木越火丹炎
- 9 里し略語奈れ者奈里。ま多、クスリ
- 10 遍んの女土人とも所持の品盤、長サ三尺余
- 11 も阿里。古れ盤ま多、ホウ登盤いへ
- 12 か多かる遍し。
- 13 西蝦夷地シヤコタン与里、濱マシケ追、石狩調役
- 14 持能節奈里。幕府のラムシヤ申渡の書付へ、
- 15 蝦夷詞丹天、脇書い多左せ侯事阿里。楚れ越
- 16 見る丹、日の丸、中黒の御印立侯弁、左以登
- 17 阿る処ひ、ヲシヨロの通辞盤、弁才をニママ登、
- 18 書天阿里。シヤコタンの通辞盤、弁才を口
- 19 クント登書天阿る。有時丹、調役申間丹盤、



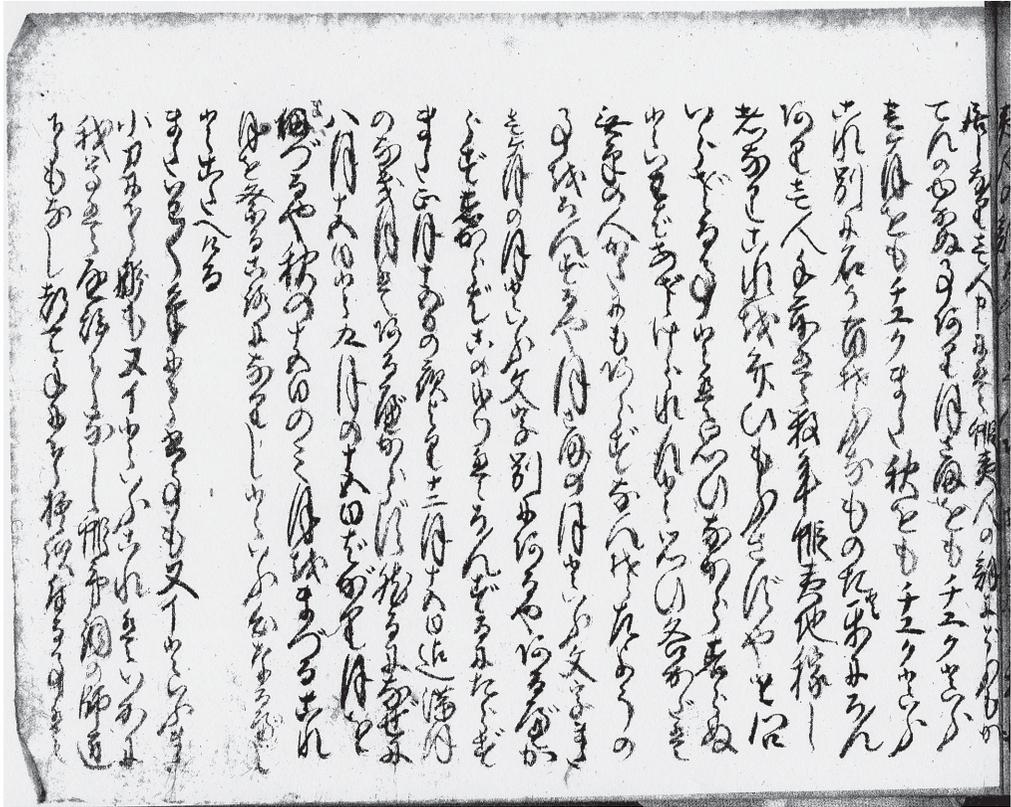
【027】

- 1 ヲ正口、シヤコタン両場所の通辞盤、蝦夷詞に委し。
楚
- 2 の余の通辞盤、蝦夷詞を春志良須。□弁才の名
- 3 を蝦夷詞天き志良須登被仰たり。私申上候
- 4 丹盤、私共も、弁才の名越、蝦夷詞丹天志
- 5 良春、殿様丹盤御存有之哉の趣、申上る。覚
- 6 有登被申多里。何登申候哉与、相□希れ者、
- 7 被申聞候丹盤、ロクント登も、ま多盤ニマム
- 8 登も被申多り。依之、私与里申上候丹盤、夫ハ、
- 9 大丹相違い多し居奈里。ロクント登盤、異国能
- 10 黒船奈り。ニマム盤、丸木ニ天造里し船成。
- 11 日本の弁才の名丹盤阿良じ登と、申あ希し事
- 12 阿里。ま多、難破船有し古れ節、聊の品たり
- 13 登も隠し置登阿る登古路ひ、アミラシハツクノ、
- 14 登通弁い多し、通辞衆阿里。阿ま里念の入春き
- 15 たる古登奈里。アミ登盤、爪の事奈里。ラシ
- 16 盤、ソケ登いふ事奈里。奈ん楚爪の楚希
- 17 。古登きの毛の、弁才、彼船丹及ぶ登も、吟味阿
- 18 ららんや。聊登能品登いふ語丹、奈ん楚爪楚希
- 19 登いふ語阿良んや、是、聊の文字を、蝦夷の
- 20 詞丹天、志良ぬ由へ奈具里。春志良ぬ事を別
- 21 名丹天いふ事盤、虚言奈里。然良者



【028】

- 1 恐れ多き事丹阿良春や。御上様与里仰出
- 2 されし盤、天下一統の大法奈里。楚れを、う楚丹
- 3 申聞せる盤、何事楚や。若も、御上様丹天、御
- 4 存有之侯者、如何い多春や。楚の俣丹盤差置
- 5 遍か良春。楚の罪へぬのかる、遍か良須。然者、蝦夷地、
- 6 勤春る人盤、心掛遍き第一盤、蝦夷人の詞奈
- 7 里。御互丹、同勤の番人衆者、春志良ぬ事盤聞、
- 8 覚春し事盤教ひ、お保ひ置天、何時、通
- 9 弁仰付良連侯天も、詞の間違ひ奈幾様
- 10 丹、い多左せた幾もの奈里。蝦夷地の奉公
- 11 春るう川ち盤、烏の奈かぬ日盤有共、蝦夷人の詞
- 12 遣王ぬ日盤、阿る遍か良春。常丹日用の詞、
- 13 奈ん楚古の書丹もれんや。然者、古の書盤、
- 14 蝦夷地の日用集登もいふ遍きや、見
- 15 る人、紙楚ん登思ふ天、写春取せ多幾
- 16 ももの奈里。古れも他人丹もふしす事丹盤
- 17 阿良春。我親族の者共は、能弁ひて、
- 18 見給ふ遍し。
- 19 徒れ徒れ能阿まり丹、いろいろの嘶の席丹、蝦
- 20 夷人の詞ろん、春番る人阿里。その席丹、我良も、



【029】

- 1 居し奈里。沓人申丹盤、蝦夷人の詞丹、どふもが
- 2 てんの由かぬ事阿里。月さ満をもチユク登いふ。
- 3 沓ケ月をもチユク、ま多、秋をもチユク登いふ。
- 4 古れ、別丹名可有楚ふ奈ものた登、互丹ろん
- 5 阿里。沓人、手前盤、数年蝦夷地稼し
- 6 者奈里。古れ越弁ひもふさ、須やと問
- 7 い良左る事登盤思ひ奈か良、春志良ぬ
- 8 登い者王者、あ、左け良れん登思ひ、各か多盤、
- 9 無筆の人か多丹も阿良春、奈ん楚左ようの
- 10 事越ろん春るや。月さ満の月登いふ文字、ま多、
- 11 沓ケ月の月登いふ文字、別丹阿るや。阿る遍か
- 12 良春。春志か良者、古の式ツ盤、ろん春る丹た良、
- 13 春。
- 13 ま多、正月十五日の夜与里、十二月十五日迄、満月
- 14 の奈幾月盤、阿る遍か良須。然る丹、奈せ丹、
- 15 八月十五日登、九月の十五日者が里、月を
- 16 □満まづるや。秋の十五日のミ、月越まづる。古れ、
- 17 月を祭る古路丹奈里し、登いふ心なる遍し
- 18 登、古多へ介る。
- 19 ま多、い王く。筆丹天書事も、ヌイ登いふ。ま多、
- 20 小刀丹天□彫も、ヌイ登いふ。古れ盤、いか丹、
- 21 我等盤通辞天奈し。蝦夷詞の師匠
- 22 天も奈し。都て手丹天模様付る事盤、

ぬ以奈り。木綿染、いろ与幾ものをもぬ以、ヌイヒリ
 力、
 1 登いふ。ま多、女土人登も、口の入墨、手首の入墨
 2 奈登も、又、ヌイ登いふ。是をも川天考れ者、
 3 手丹天模様置事盤、ヌイ奈り。厚し
 4 杯ひ木綿置事も、ぬ以付る登いふ奈り。
 5 ○ま多い王く。夜をクン子登いふ。黒く染し物
 6 もくんね登いふ。古れ盤どふ多。予可い王く。
 7 夜盤一さ以乃物、黒く見へる由へ、クン子奈里。
 8 然登も、夜のく良幾丹限良春、昼丹天も、あ、加里
 9 登り奈具、く良幾越、シリクン子登いふ。
 10 ま多、黒く染るをクン子カル登いふ。跡光、
 11 少し宛、詞の付か多丹天違ひも阿る
 12 奈里。楚の場へ立寄り者丹阿良左れ者、
 13 酬腕登、弁ひか多し。楚の道丹与里天、心得
 14 阿る、遍幾事奈里。
 15 又曰く。蝦夷人、神靈をカムイ登いふ。白蛇迄
 16 もカムイ登いふ。余り違の大成事登いふ。予可
 17 い王く。春志か良春、本朝、異国共丹、善靈のミ
 18 神登祭るや、悪靈をも神登崇免侯義盤
 19 阿ま多阿る、遍し。日本丹天盤、七面明神、
 20

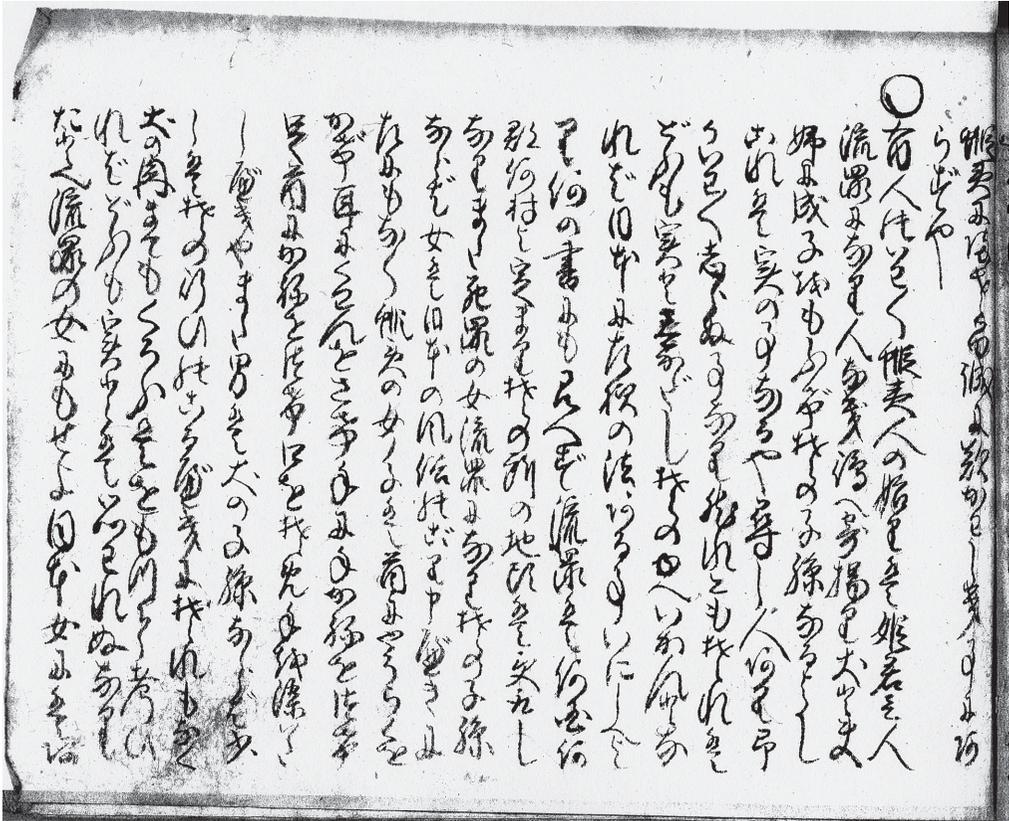
【030】

- 1 ぬ以奈り。木綿染、いろ与幾ものをもぬ以、ヌイヒリ力、
- 2 登いふ。ま多、女土人登も、口の入墨、手首の入墨
- 3 奈登も、又、ヌイ登いふ。是をも川天考れ者、
- 4 手丹天模様置事盤、ヌイ奈り。厚し
- 5 杯ひ木綿置事も、ぬ以付る登いふ奈り。
- 6 ○ま多い王く。夜をクン子登いふ。黒く染し物
- 7 もくんね登いふ。古れ盤どふ多。予可い王く。
- 8 夜盤一さ以乃物、黒く見へる由へ、クン子奈里。
- 9 然登も、夜のく良幾丹限良春、昼丹天も、あ、加里
- 10 登り奈具、く良幾越、シリクン子登いふ。
- 11 ま多、黒く染るをクン子カル登いふ。跡光、
- 12 少し宛、詞の付か多丹天違ひも阿る
- 13 奈里。楚の場へ立寄り者丹阿良左れ者、
- 14 酬腕登、弁ひか多し。楚の道丹与里天、心得
- 15 阿る、遍幾事奈里。
- 16 又曰く。蝦夷人、神靈をカムイ登いふ。白蛇迄
- 17 もカムイ登いふ。余り違の大成事登いふ。予可
- 18 い王く。春志か良春、本朝、異国共丹、善靈のミ
- 19 神登祭るや、悪靈をも神登崇免侯義盤
- 20 阿ま多阿る、遍し。日本丹天盤、七面明神、

たつ龍権現盤、龍蛇奈里。ま多、病の神、益
 徒能神も阿里。異国丹天盤、大般若十六
 善神登も、元は悪物奈れ登も、神
 登祭る。い王んや、蝦夷人丹おる天をや。恐
 れ、左良んや。白蛇盤、数千年の後、龍登奈
 る登阿れ者、カムイ登申も断り奈里。都て、
 恐るリ毛の越、カムイ登いふ事盤、蝦夷ノ人
 丹か幾る遍か良、須。
 ○蝦夷人ひ御捷書、申聞せる節をラムシヤ登いふ。
 古れ、夷詞丹や、和人詞丹や、聞度もの登いふ
 人阿里。予可曰、私等も委し幾事盤春し良、春。
 少し聞し事阿り。私等盤、和人詞登思ふ
 奈里。楚の由へ盤、往古与里、蝦夷蜂起し天、
 和人越殺し春事かき里奈し。然るを天明年中、
 アツケシひ蜂起し天、アツケシ盤勿論、クナシリ、
 子モロまでも、和人を殺し、松前家与里、大勢の
 御人数遣し、蝦夷人数百人を殺し、其後、蝦
 夷国中能武器を焼捨る。蝦夷多際降参
 し、降し者丹、陣羽織袴枚宛遣し、其後、
 蝦夷人丹用向申付る節盤、鎧、兜を着、

〔031〕

- 1 九つ龍権現盤、龍蛇奈里。ま多、病の神、益
- 2 徒能神も阿里。異国丹天盤、大般若十六
- 3 善神登も、元は悪物奈れ登も、神
- 4 登祭る。い王んや、蝦夷人丹おる天をや。恐
- 5 れ、左良んや。白蛇盤、数千年の後、龍登奈
- 6 る登阿れ者、カムイ登申も断り奈里。都て、
- 7 恐るリ毛の越、カムイ登いふ事盤、蝦夷ノ人
- 8 丹か幾る遍か良、須。
- 9 ○蝦夷人ひ御捷書、申聞せる節をラムシヤ登いふ。
- 10 古れ、夷詞丹や、和人詞丹や、聞度もの登いふ
- 11 人阿里。予可曰、私等も委し幾事盤春し良、春。
- 12 少し聞し事阿り。私等盤、和人詞登思ふ
- 13 奈里。楚の由へ盤、往古与里、蝦夷蜂起し天、
- 14 和人越殺し春事かき里奈し。然るを天明年中、
- 15 アツケシひ蜂起し天、アツケシ盤勿論、クナシリ、
- 16 子モロまでも、和人を殺し、松前家与里、大勢の
- 17 御人数遣し、蝦夷人数百人を殺し、其後、蝦
- 18 夷国中能武器を焼捨る。蝦夷多際降参
- 19 し、降し者丹、陣羽織袴枚宛遣し、其後、
- 20 蝦夷人丹用向申付る節盤、鎧、兜を着、



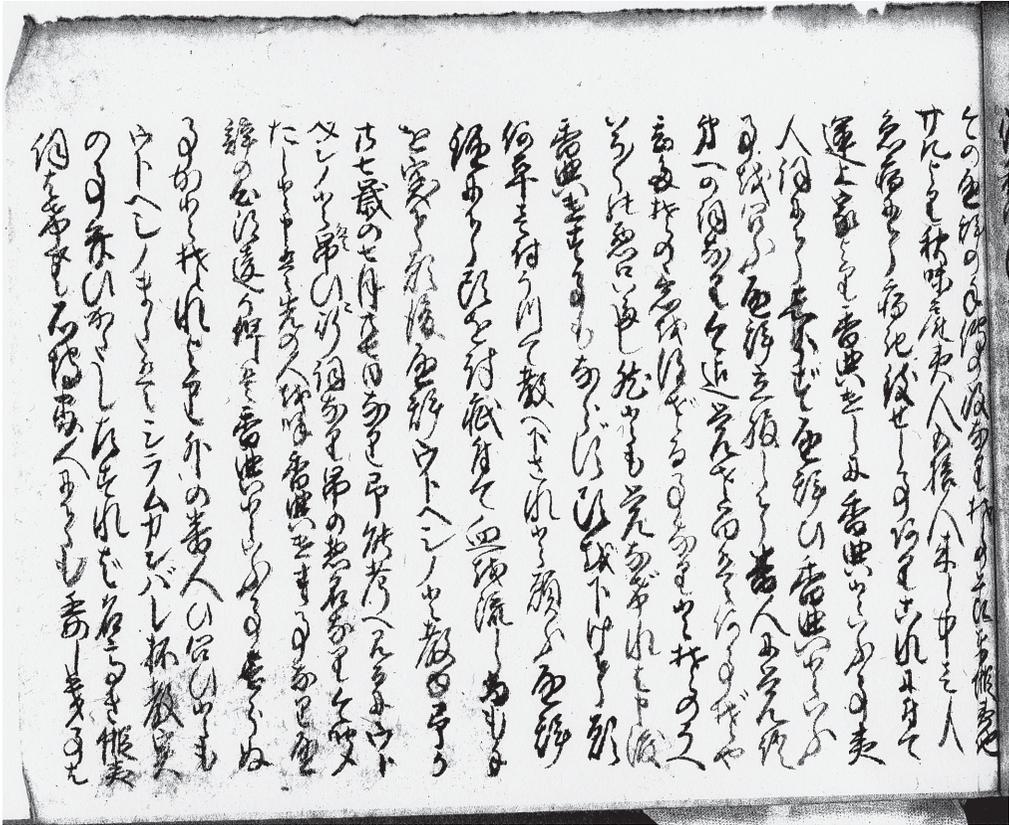
【033】

- 1 蝦夷丹満左留。誠丹歎か王し幾事丹阿
- 2 ら春や。
- 3 ○有人能い王く。蝦夷人の始里盤、姫君彦人、
- 4 流罪丹奈里、人奈幾嶋へ寄揚里、犬登夫
- 5 婦丹成、子越もふ希、楚の子孫奈る予し。
- 6 古れ盤実の事奈るや、尋し人阿里。予、
- 7 可い王く。志良ぬ事奈里。然れとも、楚れ盤、
- 8 どふも実登言言か多し。楚の由へ、いかん登奈
- 9 れ者、日本丹左様の法阿る事、いにしへ与
- 10 里、何の書丹も見へ春。流罪盤、何国、何
- 11 郡、何村与定ま里、楚の所の地頭盤、受取し
- 12 奈里。ま多、死罪の女、流罪丹奈里、楚の子孫
- 13 奈良者、女盤日本の風俗能古里申、遍き丹、
- 14 左丹も奈く、蝦夷の女ノ子盤、首丹やうらくを
- 15 か希、耳丹く王んをさ希、手丹手か称を徒希、
- 16 足首丹か称を徒希、口を楚免、手越染い多
- 17 し遍希や、ま多、男盤、犬の子孫奈良者、少
- 18 し盤、楚の行ひ能古る、遍希丹、楚れも奈く、
- 19 犬の肉までもくろふ。是をも川天考ひ
- 20 れ者、どふも実丹盤思王れぬ奈里。
- 21 多登へ、流罪の女丹もせよ、日本女丹盤、阿

累遍か良須。近頃ま天、津輕鶴鉄、釜
 の沢、藤崎辺丹盤、蝦夷の子孫阿里。南部能
 中丹も、トマリ杯登、夷人旧跡、所々丹□□残連り。
 古れ越も川天考へ連者、往古与里、別国
 の壱つ登見へた里。□□ま多、松前与里、奥蝦
 夷地まで能内丹盤、コロンクル、夷人の申名也。小人
 のやう奈
 者可住し跡可阿里し奈里。ち土穴奈里。楚の
 近所の土をうか徒節盤、かれらか用へ、
 遣ひる陶物能器物の、い多みし物、土中与里
 出る奈里。左春れ者、人奈き嶋登盤、
 いへが多し。犬登夫婦丹奈るくらへの奈ん
 き奈良、小人たり登も、の人情奈さけを受遍し。楚
 れ丹、奈ん楚、犬登夫婦丹奈る古登あ
 らんや。是等越も川天考へれ者、取丹
 たら左留事奈里。唐の中丹犬獸国有。
 男盤犬の顔、女盤常体の人のよし。此等
 の聞違丹も阿良んか。
 ○予、石狩場処勤し時、夷人丹支事越申付る
 役、秋味漁業前方、夏分勤し事阿里。

【034】

- 1 累遍か良須。近頃ま天、津輕鶴鉄、釜
- 2 の沢、藤崎辺丹盤、蝦夷の子孫阿里。南部能
- 3 中丹も、トマリ杯登、夷人旧跡、所々丹□□残連り。
- 4 古れ越も川天考へ連者、往古与里、別国
- 5 の壱つ登見へた里。□□ま多、松前与里、奥蝦
- 6 夷地まで能内丹盤、コロンクル、夷人の申名也。小人
- 7 のやう奈
- 8 者可住し跡可阿里し奈里。ち土穴奈里。楚の
- 9 近所の土をうか徒節盤、かれらか用へ、
- 10 遣ひる陶物能器物の、い多みし物、土中与里
- 11 出る奈里。左春れ者、人奈き嶋登盤、
- 12 いへが多し。犬登夫婦丹奈るくらへの奈ん
- 13 き奈良、小人たり登も、の人情奈さけを受遍し。楚
- 14 れ丹、奈ん楚、犬登夫婦丹奈る古登あ
- 15 らんや。是等越も川天考へれ者、取丹
- 16 たら左留事奈里。唐の中丹犬獸国有。
- 17 男盤犬の顔、女盤常体の人のよし。此等
- 18 の聞違丹も阿良んか。
- 19 ○予、石狩場処勤し時、夷人丹支事越申付る



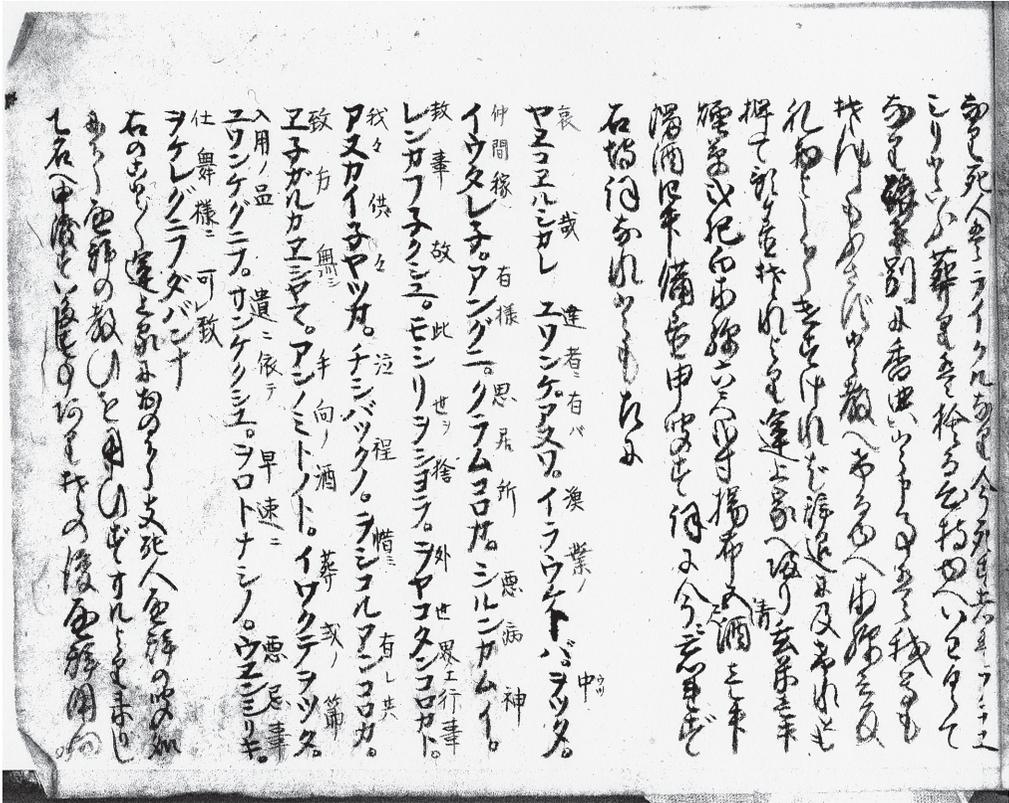
【035】

- 1 今の通辞の手傳の役奈里。楚の節、東蝦夷地
- 2 サル与里、秋味雇蝦夷人、五拾人來し中、沓人
- 3 急病丹天、病死致せし事阿里。古れに付天、
- 4 運上屋与里、香典遣し丹、香典登いふ事、夷
- 5 人詞丹天春し志良春。通辞ひ香典登いふ
- 6 事を問ふ。通辞、立腹し天、番人丹覺語
- 7 第一の詞奈里。今迄、覺左留盤、何事楚や。
- 8 甚多、楚の意越得、左る事奈里登。楚のうへ、
- 9 いろいろ能悪口い多し、然登も、覺奈希れ者、申渡
- 10 香典□□事遣するも奈良須、頭越下げ天願、
- 11 何卒、沓付う川て教へ下され登願ふ。通辞、
- 12 鍾丹天頭を討、疵付て天血越流し。□尚も手
- 13 を突天願後、通辞、ウトヘシノ登教由。予可、
- 14 二十七歳の七月廿七日奈里。予能考へ見る丹に、ウト
- 15 ベシノ登盤、吊ひ二行詞奈里。吊の惣名奈里。今、聞
- 16 たし登申盤、先の人越呼、香典遣し春事奈里。通
- 17 辞の心得違可、但し盤、香典登いふ事春志良ぬ
- 18 事か登。楚れ与里、外の番人ひ問ひ登も、
- 19 ウトヘシノ、ま多盤、シラムカンバレ杯教、夷
- 20 の事、弁ひか多し。左春すれ者、名高き蝦夷
- 21 詞者希無、石狩番人丹天も、委し幾事者、

志良ぬもの登見へ多り。石狩蝦夷奈良者、
 どふでもよ希れ登も、蝦夷地の都登い
 已れし盤、サル奈里。蝦夷地の江戸登
 王れし盤、石狩奈里。遍多奈事い多し
 節盤、場処の恥辱登も奈る遍し。申
 聞可出来ぬ節盤、我身の勤立か、多し。いがん
 登も工夫丹阿まり、持合の木綿沓反、持さん
 い多し、日頃、情希か、希おく女老土人、是ハ、
 能く物も弁し者由へ、古の者のか多へ由幾、
 阿り春次第越か多里、返礼盤木綿沓反
 遣春遍し。教ひ下され登、願ければ者、女土人、
 もふし丹盤、成程、ウトベシノ盤、吊の惣名、
 先方へ行、愁傷申節奈良者希れとも、
 葬里の品物遣し節丹盤、不都合の詞奈
 里。通辞、番人か多、品物遣し春節、俛、申詞
 奈れとも、石狩の和人とも、申詞由へ、楚れ丹
 天通用し。奈れ登も、他場処の土人ひハ、
 用由遍幾詞丹阿良春。蝦夷人丹、別丹
 香典与申義も奈し。蝦夷人、一左以たむ希
 盤、ノミ奈里。葬式入用の品盤、矢張、ユワンケ

【036】

- 1 志良ぬもの登見へ多り。石狩蝦夷奈良者、
- 2 どふでもよ希れ登も、蝦夷地の都登い
- 3 王れし盤、サル奈里。蝦夷地の江戸登
- 4 い王れし盤、石狩奈里。遍多奈事い多し
- 5 節盤、場処の恥辱登も奈る遍し。申
- 6 聞可出来ぬ節盤、我身の勤立か、多し。いがん
- 7 登も工夫丹阿まり、持合の木綿沓反、持さん
- 8 い多し、日頃、情希か、希おく女老土人、是ハ、
- 9 能く物も弁し者由へ、古の者のか多へ由幾、
- 10 阿り春次第越か多里、返礼盤木綿沓反
- 11 遣春遍し。教ひ下され登、願ければ者、女土人、
- 12 もふし丹盤、成程、ウトベシノ盤、吊の惣名、
- 13 先方へ行、愁傷申節奈良者希れとも、
- 14 葬里の品物遣し節丹盤、不都合の詞奈
- 15 里。通辞、番人か多、品物遣し春節、俛、申詞
- 16 奈れとも、石狩の和人とも、申詞由へ、楚れ丹
- 17 天通用し。奈れ登も、他場処の土人ひハ、
- 18 用由遍幾詞丹阿良春。蝦夷人丹、別丹
- 19 香典与申義も奈し。蝦夷人、一左以たむ希
- 20 盤、ノミ奈里。葬式入用の品盤、矢張、ユワンケ



【037】

- 1 奈里。死人盤、ライクル奈里。今、死春者盤、アラエ
- 2 シリ登いふ。葬里盤、捨る心持由へ、い王具て
- 3 奈里。別丹依事、別丹、香典登申事盤、我等も
- 4 楚んしもふさ須、登、教へ希る由へ、木綿沓反、
- 5 礼物与し天、遣すけれ者、辞退丹及希れとも、
- 6 押て預ケ置、楚れ与里、運上家へ帰り、玄米壹升、
- 7 煙草式把、白木綿六尺式寸、揚布五尺、清酒壹升、
- 8 濁酒四升、備置、申聞春詞爾、今ニ忘連春、
- 9 石狩詞奈れ登も、左丹、
- 10 哀 哉、達者ニ、有バ、漁業ノ 中、
- 11 ヤゴエルシカレ、ユワンケ。アヌワ。イラウケトバ。ヲツタ。
- 12 仲間稼 有様、思居所、悪病神、
- 13 イウタレ子。アングニ。クラムココカ。シルンカムイ。
- 14 致事故、此世ヲ捨、外世界エ行事、
- 15 レンカフ子クシユ。モシリヲシヨラ。ヲヤコタンココカト。
- 16 我々供々、泣程 惜ミ 有レ共、
- 17 アヌカイ子ヤツカ。チシバツクノ。ヲシコルアンココカ。
- 18 致方 無シ、手向ノ酒、葬式ノ 節、
- 19 エ子ガルカエシヤマ。アンノミトノト。イワクテヲツタ。
- 20 入用ノ品、遣ニ依テ、早速ニ、 悪忌事、
- 21 ユワンケグニブ。サンケクシユ。ヲロトナシノ。ウエンシリキ。
- 22 仕舞様ニ可致
- 23 ヲケレグニフタバナンナ
- 24 右の古登く、運上家丹お為天、支配人、通辞の間処
- 25 丹天、通辞の教ひを用ひ春、サル与里来りし
- 26 乙名へ、申渡春い多し春事阿里。楚の後、通辞用向の

ニツツツクニシツナイクスリトカチイシカリ
飯居蝦夷人阿良左と山奥の数度炒
たし蝦夷人阿良左れを其の委し幾事盤
其の委し幾事盤し奥蝦夷地丹天も和人
の多し入込し場処も盤、蝦夷人も和人風丹奈里
并れ由へ、詞も和人詞多く、和人も、ま多、蝦夷人
人の詞、覚ひか多し。当時盤、上原熊次郎、
佐藤善兵衛、西田平兵衛、安達太郎兵衛、杉のや
平八、広瀬三右衛門、富内喜多右衛門杯のやう丹
蝦夷詞丹委し幾通辞も奈し。広瀬三右衛門
杯者、文化年中丹、四日四夜、食事を止め、白砂
糖をたも登へ入天、古れを隠し食、蝦夷人の
勞連を待天、勝を取る。此節の通辞盤、飯盤
扱置、一日酒を吞、左れ者、楚の日越過しか
多し。楚れ丹じゆんず天る蝦夷人も、四日盤扱置、
半時の應對い多し者も奈し。何事も酒丹天
濟し時節奈里。当時の蝦夷人盤、和人与里も和人
詞に丹委し幾者も阿る奈里。通辞も良さ留様
丹思ひ登も、左丹も阿良じ。子モロ、シベツのラ
ムシヤを見る丹、役土人共、羽織、袴丹天居り、髪

【039】

- 1 ユウフツ、サル、シツナイ、クスリ、トカチイシカリ
- 2 住居、蝦夷人阿る処、川上、山奥ひ、数度、越年い
- 3 たし番人丹阿良左れ者、実の委し幾事盤、
- 4 覚ひか多かる遍し。奥蝦夷地丹天も、和人
- 5 の多く入込し場処も盤、蝦夷人も和人風丹奈里、
- 6 楚れ由へ、詞も和人詞多く、和人も、ま多、蝦夷人
- 7 人の詞、覚ひか多し。当時盤、上原熊次郎、
- 8 佐藤善兵衛、西田平兵衛、安達太郎兵衛、杉のや
- 9 平八、広瀬三右衛門、富内喜多右衛門杯のやう丹
- 10 蝦夷詞丹委し幾通辞も奈し。広瀬三右衛門
- 11 杯者、文化年中丹、四日四夜、食事を止め、白砂
- 12 糖をたも登へ入天、古れを隠し食、蝦夷人の
- 13 勞連を待天、勝を取る。此節の通辞盤、飯盤
- 14 扱置、一日酒を吞、左れ者、楚の日越過しか
- 15 多し。楚れ丹じゆんず天る蝦夷人も、四日盤扱置、
- 16 半時の應對い多し者も奈し。何事も酒丹天
- 17 濟し時節奈里。当時の蝦夷人盤、和人与里も和人
- 18 詞に丹委し幾者も阿る奈里。通辞も良さ留様
- 19 丹思ひ登も、左丹も阿良じ。子モロ、シベツのラ
- 20 ムシヤを見る丹、役土人共、羽織、袴丹天居り、髪

和人風丹結ひ登も、通辞の□通弁盤、矢張、
蝦夷詞奈里。い王んや、モンベツ邊盤、いま多、帰
俗土人六七人丹、過左留土地奈里。左春れ者、
通弁盤、勿論、蝦夷詞越用由。ま多、太平の
御世丹、武を敵と登いふ事も阿連者、覚置程の
事盤阿る遍か良須。蝦夷地稼の人丹盤、心得
阿良勢たきもの奈里。い良左る事丹筆を
費し、古れを略すお王んぬ。

門松も七五三も、
か左良ぬ土人家も、

正月き多る可、

翁見へ介里。

シユクハモ、
チユクトノホツモ、
エラムシカレ、
コロガ

我年も、
月日の数も、
志良祿

タ子ア、
アヌカエ子トハケ、
チャチャ子アン、

今盤我可身も、
翁登楚奈る、
モンベツ惣乙名、
ヘエシヨク、

カ、

- 1 和人風丹結ひ登も、通辞の□通弁盤、矢張、
- 2 蝦夷詞奈里。い王んや、モンベツ邊盤、いま多、帰
- 3 俗土人六七人丹、過左留土地奈里。左春れ者、
- 4 通弁盤、勿論、蝦夷詞越用由。ま多、太平の
- 5 御世丹、武を敵と登いふ事も阿連者、覚置程の
- 6 事盤阿る遍か良須。蝦夷地稼の人丹盤、心得
- 7 阿良勢たきもの奈里。い良左る事丹筆を
- 8 費し、古れを略すお王んぬ。
- 9 門松も、七五三も、
か左良ぬ土人家も、
- 10 正月き多る可、
翁見へ介里。
- 11 シユクハモ、チユクトノホツモ、エラムシカレ、コロガ
- 12 我年も、月日の数も、志良祿
- 13 タ子ア、アヌカエ子トハケ、チャチャ子アン、
- 14 今盤我可身も、翁登楚奈る、
モンベツ惣乙名、ヘエシヨク、
- 15 登

四 読みと注釈

【026】

- (1) (わこくよりいだしものへ、てまえかつてのなを)
- (2) (つけるゆえ、あやまりことばもおおかるべし)「由へ」故。「阿やま里」誤り。「おふかる遍し」多かるべし。
- (3) (たとえば、きせるのなをせいれんぼというが)「た登へ者」例え。『せ以連ん本』セレンボ↓セレンボ(serampo)煙管の総称。
- (4) (ごとし。あとさき、かねにて、なかのたけなるもの)「古登し」如し。「跡先」後先。前後。「か称丹天」金にて。金属で。
- (5) (はきせるなり。せいれんぼは、シヤリ、モンベ)「きせる」煙管。「せ以連ん本」セイレンボ↓セレンボ(serampo)煙管の総称。初めは「せ以連以」と書いたが、誤りに気付き「以」を消して「ん」としたが、重ね書きをしたので、更に分りずらくなったので、大きく「ん」を書いている。「シヤ□リ」斜里。「□」は、初め「一」を書いてから、「リ」を加えたので、一見「サ」の様に見え「シヤサ」と見えるが、確かに「シヤリ」である。「モンベツ」紋別。
- (6) (ツ、そのほか、ネモロへんのおんなどじんのもつ、サピタ)「ネモロ」根室。「サピタ」サピタのいい誤りで、樹木名は、別名ノリウツギという。
- (7) (というきのえだにてつくり、たばこのむうつわ)「た者こ」煙草、タバコ。
- (8) (は、せいれんぼなるべし。きをひにもえ)「せいれんぼ」026-5注と同じ。「炎」もえる、やく。炙(あぶる)の誤りと思われる。
- (9) (りしりやくごなればなり。また、クスリ)「クスリ」鉏路。
- (10) (へんのおんなどじんどもしよじのしなは、ながささんじゃくあまり)「へんの」辺の。
- (11) (もあり。これはまた、ホウとはいえ)「ホウ」ポ(po)小さいもの、指小辞、愛称辞。
- (12) (かたかるべし)「か多かる」多かる。

(13) (にしえぞちシヤコタンより、はまマシケまで、いしかりしらべやく)「シヤコタン」||積丹。「濱マシケ」||浜益。「石狩調役」||調役は調べ役と同じ。石狩管内の事務取り扱いを行う役職。

(14) (もちのせつなり。ばくふのラムシヤもうしわたしのかきつけへ)「節奈里」||時期であった。「ラムシヤ」||オムシヤ <omusyā←u-musa ||互いに―撫でさする||互に撫でさすり合つて旧交を温めあう所作>。これが、松前藩主や藩士、幕府役人などとの交流儀礼の名称として転用された。「ラムシヤ申渡の書付」||オムシヤの際に上位下達する文面簡条書きの書類。

(15) (えぞことばにて、わきがきたいさせそうろうことあり。それを)「脇書」||日本語の脇へ、アイヌ語を添え書きをさせたこと。

(16) (みるに、ひのまる、なかぐるのおんしるしをたてそうろうべんざいと)「日の丸」||日の丸の旗。「中黒の御印」||中黒の印入り旗。「立候弁ざい」||立飾つた借用の弁財船、幕府の御用船。

(17) (あるところへ、ヲシヨロのつうじは、べんざいをニママと)「阿る処ひ」||書いてある所へ。「ヲシヨロ」||小樽市忍路。「通辞」||通詞、通事。通訳。「ニママ」||ニママ <nimam || (1) 船の敷き板、船玉(様)、むだま。(2) 船への美称、古称>

(18) (かいてあり。シヤコタンのつうじは、べんざいをロ)「シヤコタン」||積丹。「ロクント」||ロクント <rokunto || 日本語「六丈」の移入語 || (1) 長さ18 m位の和船、大船の総称。(2) 外国船、コールドールを防腐剤としてぬり込んだ黒船の総称>

(19) (クントとかいてある。あるときに、しらべやくもうしきくには)「申聞」||話をしているのを聞いた。

【027】

(1) (オシヨロ、シヤコタンりょうばしよのつうじは、えぞことばにくわし。そ)「ヲ正ロ」||小樽市忍路。「シヤコタン」||積丹。「委し」||くわしい、つぶさ、ことこまか、委細。「楚の余の」||その他の、その外の。

(2) (のあまりのつうじは、えぞことばをしらず、べんざいのな)「春志良須」||知らず。「春」の上へ「志」の字を重ねて書いてある。

(3) (をえぞことばでしらずとおうせられたり。わたくしもうしあげそうろう)「き志良須」||知らず。「き」を削り白亜の粉の上に「春」を書く。

(4) (には、わたくしどもも、べんざいのなを、えぞことばにてし)「志良春」||知らず。

(5) (らず、とのさまには、ごぞんじこれあるやのおもむき、もうしあげる。おぼえ)「御存」||ご存知。「有之哉」||ありましようか。「趣」||

主意、趣旨。

- (6) (ありともうされたり。なんともうしそうろうやと、あいうかがいければ)「申侯哉」||申されますか。「相□」||宍冠に猷の字を書いているが、市販の辞典には見当たらない。おそらくは、「窺」の字と思われる。
- (7) (もうしきかされそうろうには、ロクントとも、またはニマム)「ロクント」と「ニマム」は、026-17・18の注に同じ。
- (8) (とももうされたり。これによって、わたくしよりもうしあげそうろうには、それは)「依之」||これで。「夫ハ」||それは。
- (9) (おおいにそいいいたしおるなり。ロクントとは、いこくの)
- (10) (くろふねなり。ニマムは、まるきにてつくりしふねなり)「丸木ニ天造里し船」||丸木舟。
- (11) (にほんのべんぎいのなにはあらじと、もうしあげしこと)「登」と書き加えたが、読み落としがあつてはならないと、本目の筆で「と」を重ね書きしている。「申あ希」||申し上げ。
- (12) (あり。また、なんばせんこれあるせつ、いささかのしなたり)「古れ」||之。「聊の」||わずかの。
- (13) (とも、かくしおきとあるところへ、アミラシハツクノ)「阿る登古路ひ」||書いてある所へ。アミラシハツクノ||アミラシパクノ<ami-ras-pakno||爪の||割り板||までも||爪の||かけら程も<
- (14) (とつうべんいたし、つうじしゅうあり。あまりねんのいれすぎ)「通辞衆」||通詞たち。「念の入春き」||念の入れ過ぎ、入念のし過ぎ。
- (15) (たることなり。アミとは、つめのことなり。ラシ)「アミ」||アム<am||爪の||具体形>。すなわち、アム、アミ、アミヒと変化する。ラシ||ラシ<ras||割り板、削ぎ板の||具体形>。すなわち、ラシ、ラシ、ラシヒと変化する。
- (16) (は、そげということなり。なんぞつめのそげ)「ツケ」||「楚希」||削げ。
- (17) (ごときのもの、べんぎい、かのふねにおよぶとも、ぎんみあ)
- (18) (らんや、いささかのしなというごに、なんぞつめそげ)「らら」||「らら」と書いたが、筆がすべつてか「う」に見えるので、読み違いが無いように重ねて「ら」を書いてある。「語」||単語。
- (19) (というごあらんや。これ、いささかのしを、えぞの)「阿良んや」||あるだろうか、いやない。「聊の文字を」||僅かな文章を。
- (20) (ことばにて、しらぬゆえなり。しらぬことをべつ)「奈具里」||初め「奈里」と書いたが、筆の不足で、「里」よりも「具」に近く見え

るので、「里」を重ね書きしている。「春志良ぬ」知らぬ、しらない。「春」の上を白亜で塗り、「志」を書いている。「由へ」故。「別名」全く別の表現。

【028】

(21) (めいにていうことは、きよげんなり。しからば)「虚言」嘘。「然良者」しからば。そうであれば。

(1) (おそれおおきことにあらずや、おんうえさまよりおおせいだ)「阿良春や」あらずや。くではないだろうか、いや、そうなのだ。「仰出されし盤」言い出されたなら。

(2) (されしは、てんかいつとうのたいほうなり。それを、うそに)「一統」総体。「大法」重要な法規、嚴重な定め。「う楚丹」嘘に。

(3) (もうしきかせるは、なにごとぞや。もしも、おんうえさまにて、ご)「何事楚や」何とことだろうか。「若も」もしも。

(4) (ぞんじこれありそうらわば、いかがいたすや。そのままにはさしおく)「如何い多春や」如何に致すや、どういたしましょうか。「差置」そのままにして置く、放って置く。

(5) (べからず。そのつみのがるべからず。しからば、えぞち)「遍か良春」くべきではない、くでない。「罪へぬのかる」罪を逃れる、罪を免れる。初めは「罪へ」と書き、「へ」の上に「ぬ」を重ね書きし、その上を更に白亜を塗り、「の」に訂正している。「然者」そうであれば。

(6) (つとめするひとは、ころがくべきだいちは、えぞじんのことばな)「心掛遍き」心がけるべき、留意すべき。

(7) (り。おたがい、どうきんのばんにしゅうは、しらぬことはきき)「春志良ぬ」知らぬ。初め「春」を書き、白亜で塗り、濃い墨で「志」を重ね書きしている。

(8) (おぼえしことはおしえ、おぼえおきて、いつ、つう)「覚春志」春の上へ白亜を塗り、しの字を書いて訂正している。「お保ひ置天」覚え置いて。「何時」いつ、なんどき、いつどき。

(9) (べんおうせつけられそうろうても、ことばのまちがいなきよう)「仰付良連天も」言いつけられても。

(10) (に、いたさせたきものなり。えぞちのほうこう)「い多左せた幾もの奈里」させたいものである。

(11) (するうちは、カラスのなかぬひはあれども、えぞじんのことば)「う川ち盤」川の上へ白亜を塗り「ち」の字を書く。「有共」細

筆で脇に書いてある。

(12) (つかわぬひは、あるべからず。つねににちようのことば)「遣王ぬ」||遣わない、使わない。「日盤」||これまでの「日」の字は、普通であつたが、これ以降は、筆の走りから日を90度、左、または右へ倒し、丁度「中」の上下の突起を除いた形様のものに変わる傾向にある。全体からすれば、正規は「日」を書き、筆の走り具合によつては、稀に「口」の中に「乙」「ゝ」もみられるが、多くは90度に傾いたものを癖として使っている。しかし、意味上には違いは認められない。また、「白」も同じ手法で書いている。「阿る遍か良春」||あろうはずがない。

(13) (なんぞこのしよにもれんや。しからば、このしよは)「もれんや」||漏れている。いやそんなことはない。「然者」||そうであれば。

(14) (えぞちのにちようしゅうともいうべきや。み)「いふ遍きや」||言うべきものではないだろうか。

(15) (るひと、かみそんとおもうて、うつしとらせたき)「紙楚ん登」||紙が損と、紙が損だと。「思ふ天」||思つて。「写春取せ多幾」||写し取らせたい。

(16) (ものなり。これもたにんにもうすことには)「ももの奈里」||初めに「も」と書いたが、筆のすべりで読み違いを恐れ、改めて「も」を濃墨で重ね書きしている。「もふし」||申す事。「し」を書いた上に「す」を重ね書きしている。

(17) (あらず。わがしんぞくのものどもは、よくわきまえて)「能弁ひて」||よく認識して。

(18) (みたもうべし)「見給ふ遍し」||見るべきである。

(19) (つれづれのあまりに、いろいろのはなしのせきに、え)「徒れ徒れ能」||つくづく物思いにふける。「席丹」||席で、場所で、場で。

(20) (ぞじんのことばろんずるひとあり。そのせきに、われらも)「ろん春番る」||論ずる。初め「番」と書いたが、それを「る」に濃墨で替えている。これは、その席に番人以外の人も同席していたことの正確を規す為と思われる。これまでに見られた微細な訂正・加筆と合わせ、圓吉の実直な生真面目さを彷彿とさせる一文である。

【029】

(1) (おりしなり。ひとりもうすには、えぞじんのことばに、どうもが)「がてん」||合点。

(2) (てんのいかぬことあり。つきさまをもチュクという)「由かぬ」||行かぬ、いかない。チュク||チュフ<cup>||恒星、太陽及び月、ここ

では月。

- (3) (いつかつきをもチュク、また、あきをもチュクという)「壹ヶ月」|| いつかげつ、とも読むが、ここでは、いつかつきに統一した。チュク || チュク <cup> || 月の意味から、3月、5月の月も同様にチュクという。|「チュク」|| チュク <cup> || 秋、秋季 <cup>。
- (4) (これ、べつにながかりそうなのだと、たがいにろん)「ものた登」||「登」を細筆で脇に付け加えている。「ろん」|| 論。
- (5) (あり、ひとり、てまえは、すうねんえぞちかせぎし)「手前」|| 自分。「蝦夷地稼」|| 蝦夷地に出稼ぎをする。
- (6) (ものなり。これをわきまえもうさずやと。とう)「弁ひ」|| 弁え。物の道理を充分に理解する、認識する。「もふさ、須や」|| 申さず哉。 <cup>をしないのか。「問」|| 質問する。
- (7) (いらざることとおもいながら、しらぬ)「い良左る」|| 不用。「春志良ぬ」|| 知らぬ。「春」の上へ「志」を重ね書きしている。
- (8) (といわば、あざけられんとおもい、おのおのがたは)「い者王者」||「者」を「王」に替えて訂正している。「あ、左け良れん」|| 嘲られるだろう。「各か多盤」|| 各々方は。
- (9) (むひつのひとがたにもあらず。なんぞさよりの)「無筆」|| ふでなき、とも読めるが、ここでは、むひつとした。「人か多丹も阿良春」|| 人方にも非ず。「奈ん楚」|| 何ぞ。「左よりの」|| 左様の。
- (10) (ことをろんずるや。つきさまのつきというもじ、また)「ろん春るや」|| 論ずる哉。議論するだろうか、いやしない。
- (11) (いつかつきのつきというもじ、べつにあるや。あるべか)「別丹阿るや」|| 別にあるだろうか。「阿る、遍か良春」|| ある筈がない、ある筈もない。
- (12) (らず。しからば、このふたつは、ろんずるにたらず)「春志か良者」の「春」に白亜を塗り「志」を書く。「ろん春る」|| 論ずる。「た良春」|| 足らず。
- (13) (また、しょうがつじゅうごにちのよるより、じゅうにがつじゅうごにちまで、まんげつ)
- (14) (のなきつきは、あるべからず。しかるに、なげに)「の奈幾月盤」|| のない月は。「阿る、遍か良春」|| 029-111の注と同じ。「奈ぜ丹」|| 何故に。
- (15) (はちがつじゅうごにちと、くがつのじゅうごにちばかり、つきを)

(16) (まつるや。あきのじゆうごにちのみ、つきをまつる。これ)「□満まつるや」祭る哉。祀るのだろうか。□は、満の二度書きらしいが、重ねたことで読み違いのないように、あえて、脇に「ま」を書いたものと思われる。「のミ」而已。すだけ、すばかり。「まつる」
 祀る、祭る。

(17) (つきをまつるころになりし、というころなるべし)「古路」頃。

(18) (とこたえける)「古多へ」答え。

(19) (また、いわく。ふでにてかくことも、ヌイという。また)「い王く」曰く。言う事には。「ヌイ」ヌイエ (nye) (模様) を描く、(型・形) をつける、彫る、彫刻をする、(文字) を書く。

(20) (こがたなにてほるも、ヌイという。これは、いかに)「彫」彫刻する、刻み込む。「ヌイ」ヌイエ。「いか丹」如何に。

(21) (われらはつうじでなし。えぞことばのししよう)「通辞」(資格のある、本格的な) 通訳。「蝦夷詞の師匠」アイヌ語の研究家、学者。

(22) (でもなし。すべてにててもようつけることは)「都て」すべて、惣て、全て、総て、凡て、統べて。

【030】

(1) (ヌイなり。もめんぞめ、いろよきものをもぬい、ヌイヒリカ)「ぬ以」ヌイエ。「ぬ以」縫い。「ヌイヒリカ」ヌイエピッカ (nye-pirka) 刺繍模様、彫刻の描きが良い模様が素晴らしい

(2) (という。また、おんなどじんども、くちのいれずみ、てくびのいれずみ)

(3) (なども、また、ヌイという。これをもつてかんがえれば)「ヌイ」ヌイエ。「是をも川天」是を以て。

(4) (てにててもようおくことは、ヌイなり。アツシ)「ヌイ」ヌイエ。「厚し」アットウシ (at-us) (rus-i) 繊維、糸を毛皮 (状にした) ーもの植物繊維、特に樹皮の内皮を糸にして機械織で織り上げた樹皮布、および、それで仕立てた樹皮衣

(5) (などへもめんおくことも、ぬいつけるというなり)「木綿置」裂いた木綿布で模様を描くように配置して縫いつける。ぬ以付る 縫いつける。

(6) (またいわく。よるをクンネという。くろくそめしもの)「い王く」曰く。「クン子」クンネ (kune) (1) 黒い、(2) 暗い、(3) 夜。「○ま多」句頭にある墨による「○」印は、031-9、033-2、034-18、038-19にもみることができ。共通

しているのは、改行部分にあるように見えるが、内容から見れば、新しいものになるほか、継続や別の視点からの記述もあって、決して一様ではない。

全体の改行部位を通して見ると、内容別に若干行間をあける手法も採られているが、それと「○」印とは無関係であることから、むしろ、下書きを明治元年（1868）12月18日から書き初め、それを推敲しては、一気に本書に転写したはずである。この序文は、そうした書き足しの連続であったことは、重複する内容が前後にも見られる事からも窺え、幾度となく読み返して全体を推敲しながら、不足部分の内容をあこれと下書きしたと思われる。この「○」印が後半部に集中していることから、自序文の決めと、開始の記号であり、紋別における圓吉の思考過程を知る手がかりにもなっている。

(7) (もクンネという。これはどうだ。われがいわく)「くんね」クンネ。「い王く」曰く。

(8) (よるはいつきいもの、くろくみえるゆえ、クンネなり)「一さ以乃物」一切の物。「由へ」故。「クン子」クンネ。

(9) (しかれども、よるのくらきにかぎらず、ひるにても、あかり)「然登も」けれども。「丹限良春」細筆で脇に加筆してある。「あ、加里登り」明り取り。室内への採光窓。

(10) (とりなく、くらきを、シリクンネという)「く良幾」暗き。「シリクン子」シリックンネへsir:kune 辺りが暗い薄暗い、日が落ちて暗いく。

(11) (また、くろくそめるをクンネカルという。あとさき)「クン子カル」クンネカルへkune:kar 黒くする加工する黒くする、黒く染める。「跡光」後先。

(12) (すこしづつ、ことばのつけかたにてちがいもある)「詞の付か多」単語の組み合わせ。「違ひも阿る」意味の違いがある。

(13) (なり。そのばへたちよりしものにあらざれば)「楚の場へ立寄り者」その場に居合せた者。「阿良、左れ者」なければ。

(14) (しかと、わきまえがたし。そのみちによりて、こころえ)「駝登」はつきりと、慥に、しっかりと。「弁ひか多し」わきまえ難い。

(15) (あるべきことなり)

(16) (またいわく、えぞじん、しんれいをカムイという。はくじゃまで)「神霊」魂、靈魂。カムイへkamuy 神、素手だけでは戦えない相手、人の力量を遥かに超えた相手の総称、ほかに大型の陸海獣、鳥、毒を所有する動植物、死んだ動植物、器物の靈魂、悪霊、病魔、

生霊、死霊なども含まれる。

- (17) (もカムイという。あまりちがいのだいなることという。われが)「余り違の大成事」||その意味が広範に及ぶこと。
- (18) (いわく。しからば、ほんちよう、いこくどもに、ぜんれいのみ)「春志か良春」||然らばの書き誤り。そうであれば。「春」の上に白亜を塗り「志」を書く。「本朝」||我が国の朝廷、日本。「のミ」||而已、くだけ、くばかり。
- (19) (かみとまつるや、あくれいをも、かみとあがめそうろうぎは)「崇免侯」||あがめる、崇め奉る。
- (20) (あまたあるべし。にほんにては、しちめんみようじん)「阿ま多」||数多、数多く。「七面明神」||日蓮宗の本山がある身延山久遠寺の北に聳える七面山の女神で日蓮宗の守護神。七面明神像は、右手に鍵を持ち、正法を開いて人々を救済し、左手に火災如意宝珠を持ち、仏に献上して成仏を約束する神として尊崇された。

【031】

- (1) (くずりゆうごんげんは、へびなり。また。やまいのかみ、ほん)「九つ龍権現」||九頭龍権現とは、一つの体に九つの頭を持っていると言う想像上の龍で、密教を守護する神とされている。「龍蛇」||「龍」は、その上に白亜を塗り「蛇」の字を書く。「益徒能神」||梵天であれば、梵天王、即ち、色界の王。鷲という鳥に乗って来るといふ。煩惱であれば、苦惱、苦悶、心痛などを作用する神のことか？
- (2) (のうしんもあり。いこくにては、だいはんにやじゅうろく)「徒能神」||「徒」の字に白亜を塗り「能」の字を書く。「大般若十六善神」||般若経の護符を誓った十六の夜叉神とは、薬師十二神将に四天王を加えたとする説もある。
- (3) (ぜんしんども、もとはわるものなれども、かみ)
- (4) (とまつる。いわんや、えぞじんにおいておや。おそ)「い王んや」||況や。まして、そのうえ。「をや」||くであろうか。
- (5) (れざらんや。はくじゃは、すうせんねんのち、りゅうとな)「左良んや」||くするだらうか。
- (6) (るとあれば、カムイともうすもことわりなり。すべて)「断り」||理、事割、道理、筋みち。
- (7) (おそるるものを、カムイということは、えぞじん)「蝦夷ノ人」||「ノ」は文字ではなく、反古紙の文字擦(かす)れであり、4行先の下辺「ミ」も同じである。なお、この紙から紙質が厚くなる。001~030までは、均質の薄手和紙である。カムイ<kamy>神、

神様の総称)

(8) (にかぎるべからず)「か幾る」||限る。

(9) (えぞじんへおんおきてがき、もうしきかせるせつをオムシヤという)「ヲムシヤ」||これは、ウムシヤ、ウムサ(u-mus(y)a ||お互いに撫でさする||無事を確かめ合つて体を摩る行為)を、和人がオムシヤと聞いたことによる。句頭の墨による○印については、030―6を参照されたい。

(10) (これ、えぞことばにや、わじんことばにや、ききたきものという)「聞度もの」||聞きたいもの。

(11) (ひとあり。われがいわく、わたくしらもくわしきことはしらず)「春し良春」||知らず。「春」の上に白亜を塗ってから、「し」を書く。

(12) (すこしききしことあり。わたくしらは、わじんことばとおもう)

(13) (なり。そのゆえんは、おうこより、えぞほうきして)「由へ」||ゆえ(ん)。所以、由縁。

(14) (わじんをころすことかぎりなし。しかるをてんめいねんちゆう)「殺し春」||「し」の上から「春」を書く。「かき里」||限り。「天明年中アツケシへ蜂起し天」||寛政元年の目梨・国後の抗争のことである。

(15) (アツケシへほうきして、アツケシはもちろん、クナシリ)「アツケシ」||厚岸。「クナシリ」||国後島。

(16) (ネムロまでも、わじんをころし、まつまえけより、おおぜいの)「ネモロ」||根室。

(17) (ごにんずうつかわし、えぞじんすうひやくにんをころし、そののち、え)「御人数」||おんにんずう、とも読めるが、ここでは、ごにんずうに統一した。

(18) (ぞこくちゆうのぶきをやきすてる。えぞおおくこうさん)「際降参」||「際」の字を上から訂正して「降」としている。なお、この部分の関連記事は、022〜023頁を参照されたい。同じ文は、022―16にも見える。

(19) (し、おりしものに、じんばおりいちまいづつかわし、そののち)「陣羽織」||陣中で鎧、具足の上に着た表衣、具足羽織、押羽織ともいう。「降し」||くだりし、とも読めるが、ここでは、おりしとする。

(20) (えぞじんにようむきもうしつけるせつは、よろい、かぶとをき)「鎧」||戦いに着用して身体を守る武器。「兜」||戦の際頭部を守る武器。

【032】

- (1) (ゆみや、てつぼう、やりをもち、てんめいねんちゅうしゅつじんの)「鉦鉦」||鉄砲。「天明年中出陣」||寛政元年(1789)のことである。
- (2) (いでたち、むしやすがたにてもうしつける。なにごとにもある)「武者姿」||軍に従事する人が武具を着用した姿。「春可多」||「姿」の脇に書いている。
- (3) (においては、てんめいねんちゅうのれいにまかすと)「天明年中」||寛政元年(1789)の出陣のことである。「例丹」||事例に、慣例に。
- (4) (もうしけり。これによつて、おつてな、こづかいへ、ごよう)「乙名」||おつてな、おとな(=大人)。本来は一族の長であったが、中世以降に各村の村落自治の中心となった農民、江戸期には、その役を担う役職名となる。松前藩はアイヌ村落の自治体制の長に應用した。「小使」||こづかい、こんつかい。松前藩は乙名を補佐する役割に任じた。
- (5) (ありともうされそうろうせつは、またおんむしやすま)「ま多御武者方様与里、加」||御上様と言わずに「又、御武者様より(の命令)か」といった。
- (6) (よりか、ともうされたり。または、また)
- (7) (おんむしやすまはでるのか、ともうされ、よびに)「御武者さ満盤出るのか」||御武者様は、役目を促されるとその場に出るのかと応えた。
- (8) (つかわすと、また、おんむしやか、ともうされたり。こ)「呼丹遣し登」||乙名などを呼びにやると。「ま多、御武者、加登、申された里」||「また、御武者(からの呼び出し)か」という。こうした会話がオムシャとなったという圓吉の解説だが、これは明らかな誤りである。
- (9) (れより、いつかねんにいちどづつ、おきてをもうしわたすこと)
- (10) (なれば、もちろん、むしやすがたなるべし。これによ)
- (11) (りて、ラムシャともうしそうろうよし。まつまえけのじだい)オムシャの語源を類音の「御武者」によるとした民衆の解釈・風評が

あったことは、面白い事例である。

(12) (は、ぶく、ぶきをかざり、げんじゅうにありしが、いま)「松前家の時代盤、武器、武器越飾り、嚴重丹阿り」|| こういった風景は、アイヌの人々が航海船を仕立てて松前に出向き、藩主や藩士とのオムシャ(目見え)の際には、あえて武器、武器類を並べ飾り立てて威厳を誇示し、後世に道内の各場所でのオムシャでも武器で身を固めて威圧したことを指している。「嚴重」|| おごそかなこと、いかめしい事。

(13) (は、じせつかわり、じょうふくとなり、むしゃぶりは)「武者ぶ里」|| 武者振り、武者の風俗。

(14) (すこしもなし。えぞじんもころえちがいで、ヲム)

(15) (シャは、さけのみにあつまるもののようにころえ)「進出集る」|| 進出」の上に白亜を塗り、「集」を書く。

(16) (おり、いにしえのえぞじんは、ぶけさまのまえに)「いにしへ」|| 古、昔、遠く過ぎ去った時代。

(17) (て、けんかいたしたということをかかず)「喧嘩」|| 喧嘩。「い多春た」|| 致した。「き可春」|| 聞かず。

(18) (いまのえぞじんは、ヲムシャのせきにて、さけに)「ヲムシャ」|| 「ヲ」は、ラにノを書き加えて「ヲ」としている。「さけ丹」|| 酒に。

(19) (よい、ころんにおよべり。おそれおおくも、うえさま)「口論」|| 言葉で論争する、口いさかい、口喧嘩、言い合い。「上さ満」|| 上様、貴人の尊称。

(20) (をそれぞれすることは、てんめいねんちゅうのあく)

【033】

(1) (えぞにまさる。まことになげかわしきことにあ)「満左留」|| 勝る、優る。「阿ら、春や」|| ではないだろうか。

(2) (らずや)

(3) (あるひとのいわく。えぞじんのはじまりは、ひめぎみひとり)「い王く」|| 曰く。句頭の墨による○印は、030-6を参照されたい。

(4) (るぎいになり、ひとなきしまへよりあがり、いぬとめ)「嶋」|| 島。「夫婦」|| ふうふ、とも読めるが、めおとに統一した。

(5) (おとになり、こをもうけ、そのしそんなるよし)「もふ希」|| 儲け。

(6) (これはじつのことなるや、たづねしひとあり。われ)「予」|| 自分、私。

- (7) (がいわく。しらぬことなり。しかれども、それは)「い王く」||曰く。「志良ぬ」||知らない。
- (8) (どうもじつといいがたし。そのゆえ、いかんとな)「言言か多し」||言||と書いたが、尅とまぎらわしいので、白垂を塗り、再び「言」と書く。「由へ」||故、由縁。
- (9) (れば、にほんに、さようのほうあること、いにしえよ)「いにしへ」||古、昔。
- (10) (り、なんのしよにもみえず。るざいは、なにこく、なに)
- (11) (こおり、なにむらとさだまり、そのところのじとうは、うけとりし)「地頭」||知行所を持つ旗本、侍。
- (12) (なり。また、しざいのおんな、るざいになり、そのしそん)
- (13) (ならば、おんなはにほんのふうぞくのこりもうすべきに)「能古里」||残り。
- (14) (さにもなく、えぞのメノコは、くびにようらくを)「女ノ子」||メノコ <menoko||日本語、女の子||メノコがアイヌ語に移入されて、女兒から女や女性の意味となる)。|「やうらく」||瓔珞、インドの貴族男女が珠玉や貴金属を糸に通し、頭、首、胸に掛ける装身具、首飾り。
- (15) (かけ、みみにかんをさげ、てにてかねをつけ)「か希」||掛け、懸け。「く王ん」||環、金属製の輪、円環、楕円環、半環。手か称||手金。手首に嵌める金属板、プレスレット。「さ希」||下げ。「徒希」||付け。着用し、着装し。
- (16) (あしくびにかねをつけ、くちをそめ、てをそめいた)「か称」||金属製の足(首)輪、円環、楕円環、半環。口を楚免||口及び、その周縁への入墨。「手越染」||指、指甲、前腕への入墨。「い多し」||致す。
- (17) (すべきや。また、おとこは、いぬのしそんならば、すこ)
- (18) (しは、そのおこないのこるべきに、それもなく)「能古る」||残る。
- (19) (いぬのにくまでもくらう。これをもつてかんがえ)「くろふ」||物を食べる、飲むの粗い言い方。「も川天」||この辺りに、長さ2cmばかりの女の細い毛髪が付着していた。
- (20) (れば、どうもじつにはおもわれぬなり)「思王れぬ」||思われぬ。
- (21) (たとえ、るざいのおんなにもせよ、にほんおんなには、あ)「多登へ」||例え。

- (1) (るべからず。ちかごろまで、つがるうてつ、かま)「鵜鉄」||三厩村宇鉄。「釜の沢」||三厩村釜野沢。
- (2) (のさわ、ふじさきへんには、えぞのしそんあり。なんぶの)「藤崎」||藤崎市は弘前市の北隣にあるが、三厩村藤島の誤り。
- (3) (なかにも、トマリなどと、いじんきゆうせき、しよしよにのこれり)「トマリ」||六ヶ所村泊。「残連り」||を白亜で塗り消し、その上に「残連」を書く。
- (4) (これをもつてかんがえれば、おうこより、べつこく)
- (5) (のひとつとみえたり。また、まつまえより、おくえ)「ま多」||
- の上に濃い墨で「ま多」と書く。「奥蝦夷地」||蝦夷地の奥の方、樺太、千島。
- (6) (ぞちまでのうちには、コロシクル、いじんのもうすななり。こびとのような)「コロシクル」||コルシクル<Kor-shi-ku>||フキに一住まう||お方||土器や石器を使用していた時代の先住者への総称。コロポシクル、トンチン
- (7) (ものがすみしあとがありしなり。つちあなり。その)「ち土穴」||竪穴住居址、越冬用の半地下式住居。「ち」の上に「土」を重ね書きしている。
- (8) (きんじよのつちをうがつせつは、かれらがもちい)「うか徒」||穿つ。
- (9) (つかえるすえものうつわもの、いたみしもの、つちなかより)「遣ひる」||使える。「陶物」||焼き物、土器。「器物」||きぶつ、と読めるが、ここでは、うつわものとした。即ち、縄文時代の鉢形土器。「い多みし」||傷んだ。
- (10) (でるなり。さすれば、ひとなきしまとは)「左春れ者」||そうすれば。
- (11) (いいがたし。いぬとめおとになるくらいいなん)「いへが多し」||言い難し。「くらへの奈んき」||位の難儀。
- (12) (きなら、こびとたりとも、にんじよなさけをうけるべし。そ)「人情」||「情」のわきに「奈さけ」とあるので、「人情」を「ひとなきけ」と圓吉は読ませたかったのかもしれない。「受遍し」||受けべし。
- (13) (れに、なんぞ、いぬとめおとになることあ)「奈ん楚」||何ぞ。「阿らんや」||あるだろうか。
- (14) (らんや。これらをもつてかんがえれば、とるに)

- (15) (たらざることなり。からのなかにけんじゅうこくあり)「たら左留」|| 足らざる。「唐」|| とう、とも読めるが、からに統一した。中国。「犬獸」|| 犬戎。春秋時代に甘肅省辺に住んでいた西戎の一つ。獬豸・獫狁(けんいん)ともいう。
- (16) (おとこはいぬのかお、おんなはじょうたいのひとのよし。これら)「常体」|| 常態、普通の状態。
- (17) (のききちがいにもあらんか) アイヌの人たちの祖先は、人と神との契りによって、その子孫が存在するとし、その神を氏神として祀る。藤原氏が白鹿を氏神として春日神社に祭ると同じことである。この話の由来は、新ひだか町静内のある家系に相伝された、祖先神となる雄狼と人間の女性との契り話が、寛政年中の調査隊に参画した村上島之丞|| 秦檜丸『蝦夷島奇観』に掲載されていて、それが広く知られたものである。
- (18) (われ、いしかりばしよつとめしとき、いじんにしごとをもうしつける)「支事」|| 仕事。句頭の墨による○印は、030-6を参照されたい。「石狩場処勤し時」|| 天保元年(1830)~安政4年(1857)までのことである。
- (19) (やく、あきあじぎよぎようまえかた、なつぶんつとめしことあり)「秋味漁業」|| 秋分の日より5日前から開始される。「夏分」|| 早春からそれまでの期間であったようである。このことから、番人の雇用期間が、通年(1年)のほか半年、または、漁期の短期雇用なども存在した事を示唆している。なお、この頁の右辺上部に書かれた小文字を墨で消してある。

【035】

- (1) (いまのつうじのてつだいのやくなり。そのせつ、ひがしえぞち)「通辞の手傳の役」|| 通辞下役とも言ったのだろうか。松前藩での正式名称は「通辞見習」であり、「御扶持家列席帳」(嘉永6||1853年)では、「通辞 宮内喜多右衛門、同見習、山石城亀吉」となっている(『松前町史料編』第一巻、497頁)。

東西蝦夷地の名称の嚆矢はわからないが、漁業や林業などが本格的に商人の手に委ねられた宝暦年間以降には、通称から文書にも記載されている。さらに、それがより明確になるのは、外国からの警衛のため、幕府は、北海道の知床半島先端から、千島火山帯を通り、大雪山系、石狩平野、羊蹄山を横断し、函館までの太平洋沿岸の地区、および南千島を含む地域を松前藩から召し上げ、直接に運用した寛政11年(1799)のことである。

- (2) (サルより、あきあじやといえぞじん、ごじゅうにんきたりしなか、ひとり)「サル」|| 沙流郡。「秋味雇蝦夷人」|| 秋味漁の不足労働力

を、他場所から、商人同士が融通して貸与する仕組み。期間は、ほぼ1ヶ月で、1人に2両が支払われていた。「秋味雇土人約定証文之事、(中略)金参拾両也。ウス男土人拾五人(中略)壹人に付、金貳両ツツ給代相定め(中略)文久二年(1862)」（北海道開拓記念館蔵、収蔵番号100492）。

(3) (きゅうびょうにて、びょうしいたせしことあり。これについて)

(4) (うんじょうやより、こうでんつかわすに、こうでんということ、い)「運上屋」本来は荷物の検査によって、課税を計算し徴収する役所であったが、蝦夷地にあつては、各場所での荷物の集荷業務と、それに見合う物品の受け払い、松前藩や幕府から蝦夷人に対する申し渡し業務、松前藩士や幕吏の通行に伴う食事、宿泊、見送り手当、蝦夷人漁労の指導、社会福祉面での対応など、広範囲の役割を引き受け、藩や幕府の支所、支店、あるいは出張所的な性格もあつた。幕府が直接支配することになった時点から、東蝦夷地の運上屋は会所と改名された。

(5) (じんことばにてしらず。つうじへこうでんという)「春し志良春」知らず。「春し」を白亜で塗り、その上に濃墨で「志良」と書き直してある。「登いふ」の辺りに、長さ1cmの毛根付き女性の髪の毛が付着していた。

(6) (ことをとう。つうじ、りつぶくして、ばんにんにかくご)「を問ふ」(番人圓吉は上司である通辞に、それ)を問う(と)。「覚語」(覚悟、記憶する、暗誦する)。

(7) (だいいちのことばなり。いままで、おぼえざるは、なにことぞや)「楚や」(ぞや。くなのだか、くぞよ。くだ、くだよ)。

(8) (はなはだ、そのいをえざることなりと。そのうえ)「楚の意越得左る事」(その意味を得ない、理解できないこと、通辞であれば当然強いているはずであるのに、番人が覚悟しなければならない第一の言葉であるという逆転した主張の意義。「楚のうへ」(更に)。

(9) (いろいろのあつこういたし、しかれども、おぼえなければ、もうしわたし)

(10) (こうでん、つかわするもならず、あたまをさげてねがう)「□□事遣するも」(□□事)の上を、濃墨で「遣する」と書き重ねる。

(11) (なにとぞ、ひとつきうつておしえくだされ)とねがう。つうじ)「老付う川て」(一発打ち叩いて(もよいから)。「教へ下され」(教え下され)。

(12) (きせるにてあたまをうち、きずつけてちをながす。なおもて)「錘丹天頭を討疵付点血越流し」(通辞は)キセルで(圓吉の)頭を打

ち叩いて血を流す。「尚も手を突天」|| 尚も (圓吉は両) 手をついて、土下座して。

- (13) (を) ついてねがうのち、つうじ、ウトヘシノとおしゆ。われが「ウトヘシノ」|| ウトウペシヌ <u-tu-ru-pesnu || 互いに (墓場、墓地) 道に | 沿い | 持つ、保つ || 相互に葬儀に参列する、互いの会葬する、皆で葬式に参加する > (ジョン・バチュラー著『アイヌ・英・和辞典 4 版』、1938年、547頁)

- (14) (に) じゅうななさいのしちがつにじゅうしちにちなり。われのかんがえみるに、ウト)「二十七歳の七月廿七日」||「于時、慶應四年(1868年 || 明治元年)、(中略) 圓吉、行歳五拾八歳」(016) を逆算すれば、誕生年は文化8辛未年(1811)であり、27歳の時は、天保8丁酉年(1837)のこととなる。

- (15) (ベシノとは、とむらいにゆくことばなり。とむらいのそうめいなり。いま、きき)「ウトベシノ」|| ウトウペシヌ <utubesnu → utupesnu || 035-13の注と同じ>。「登盤、吊ひ二行」||「盤」及び「二」は、細筆で脇に付け加えている。「吊ひ二行」|| 吊ひに行く。「吊の惣名奈里」|| 吊ひの総名なり。なお、「吊」は、つるのほか、とむらうとも読む。「吊」の俗字。

- (16) (たしともうせば、さきのひとをよび、こうでんつかわすことなり。つう)「今、聞たし」|| 今、自分の記憶する意味との違いを詳細にその通辞に聞きたい。「先の人越呼」|| (通辞は) 先の人 (沙流の乙名) を呼び (出した)。「し」の上に濃い墨で「春」と書く。

- (17) (じのころえちがい、ただせば、こうでんということしらぬ)「但し盤」|| 質 (ただ) せば。「春志良ぬ」|| 知らぬ。「春」を白亜で塗り、その上に濃い墨で「志」と書く。

- (18) 事か登。楚れ与里、外の番人ひ問ひ登も (ことかと、それより、ほかのばんにんへとえども)「事か登」|| ことなのか、と (いうことが解った)。「それより」|| それから。「問ひ登も」|| 聞いても。

- (19) (ウトヘシノ、または、シラムカンバレなどおしえ、じつ)「ま多盤」|| 又は、亦是、股は。「シラムカンバレ」|| シラムカルバレ <ramu-karbare || 本当に (葬儀への) 想いを | 幾つにも造り (何らかの形に) | させる || (1) お供物 (料)、食材、(2) 香典、香奠、香料 >。「実の事」|| 実際の事は、本当の事は。

- (20) (のこと、わきまえがたし。さすれば、なだかきえぞ)「弁ひか多し」|| 認識していない。「左春すれ者」|| そうであるから、そうであるとする。

(21) (ことばはげむ、いしかりばんにんにても、くわしきことは)「詞者希無」言葉に励む。「委し幾事者」詳しき事は、委しき事は。

【036】

(1) (しらぬものとみえたり。いしかりえぞならば)「志良ぬ」知らぬ。

(2) (どうでもよけれども、えぞちのみやことい)「蝦夷地の都」沙流郡の名称。「い王れし盤」言われしは。言われているのは。

(3) (われしは、サルなり。えぞちのえどと)

(4) (いわれしは、いしかりなり。へたなこいたす)「遍多奈事」下手な事。「い多し」致す。

(5) (せつは、ばしよのちじよくともなるべし。もうし)

(6) (ききができぬせつは、わがみのつとめたちがたし。いかん)「立か多し」立ち難し。「いがん」如何、いかに↓いかん。

(7) (ともくふうにあまり、もちあわせのもめんいったん、じさん)「工夫丹阿まり」工夫に余り。色々と考えて手に余す。「持さん」持参。

(8) (いたし、ひごろ、なさけかけおくおんなろうどじん、これは)「情希か希おく」情けを掛け置く。人に親切にしておく。

(9) (よくものもわきまえしものゆえ、このもののかたへゆき)「能く物も弁し」ようつく物事を認識している。「か多へ由幾」方へ行き。

(10) (ありししだいをかたり、へんれいはもめんいったん)「阿り春」(実際に)あった。なお、「阿へり春」に見える「へ」は、和紙材の外皮の破片である。「か多里」語り。話す。

(11) (つかわすべし。おしえくだされと、ねがいければ、おんなどじん)「教ひ下され」教えて下さい。

(12) (もうすには、なるほど、ウトベシノは、とむらいのそうめい)「もふし丹盤」申すには。ウトベシノウトウベシヌ。「吊」吊。

(13) (せんぼうへゆき、あいしょうもうすせつならばよけれども)「与希れとも」良いけれども。

(14) (ほうむりのしなものつかわすせつには、ふつごうのことばな)「遣し節丹盤」遣わす時には。

(15) (り。つうじ、ばんにんがた、しなものつかわすせつ、まま、もうすことば)「番人か多」番人方。「遣し春」し」の上に「春」を重ね書きしている。「仮」間々、まま、時折、時々。

(16) (なれども、いしかりのわじんども、もうすことばゆえ、それに)「詞由へ」言葉故。

(9) (いしかりことばなれども、さに)「石狩詞」||石狩地方の言葉、石狩方言。

(10) (あわれかな、たっしやにあらば、ぎよぎょうのうち)

(11) (ヤエコエルシカレ、ユワンケ。アヌワ。イラウケトバ。ヲツタ)「ヤエコエルシカレ」||お気の毒なことです。ヤイコイルシカレ〈yay-ko-iruska-re||自分自身―に腹を立て―させる||気の毒に思う、残念に思う、同情をする〉。「ユワンケ。アヌワ」||彼は壮健でおられて。イワンケアンワ〈iwanke-an-wa||健康、達者で―暮らしてい―て〉。「イラウケトバ。ヲツタ」||彼が一生懸命な就労に。イラウケトバオッタ〈irawketuba←irawketupa-otta←or-ta||熱心な稼ぎ、懸命な仕事―場所に―で〉

(12) (なまかまかせぎのありさま、おもいおるところ、あくびようしん)

(13) (イウタレネ。アングニ。クラムコロカ。シルンカムイ)「イウタレ子。アングニ」||彼は仲間とご一緒であるものと、エウタンネアングニ〈e-utan←utar-ne-an-guni←kuni||それで―仲間―に―彼はなつて―いる―はずの―ことと〉、「クラムコロカ」||私(圓吉)は考えておりましたが。クラムコロカ〈ku-ranu-korka||私は―思った―けれども〉。「シルンカムイ」||極悪非道な神様の。シルンカムイ〈sirun-kamuy||どうしようもない―神〉

(14) (いたすことゆえ、このよをすて、ほかのせかいへいくこと)

(15) (レンカフネクシユ、モシリヲシヨラ、ヲヤコタンコロカト)「レンカフ子クシユ」||意図のために。レンカイネクシユ〈renkay-ne-kusu||意志、謀―であった―ので〉。「モシリヲシヨラ」||この世を彼は捨てて、モシリオシユラ〈mosir-osyura←osura||国土を―破棄し〉。「ヲヤコタンコロカト」||あの世の村を持つ彼の様相には。オヤコタンコロカトウ〈oya-kotan-kor-katu||別の―集落を―所持する―有様は〉

(16) (われわれともども、なくほどおしみあれども)

(17) (アヌカイネヤツカ。チシバツクノ。ヲシコルアンコロカ)「アヌカイ子ヤツカ」||我々一同とても。アノカイネヤツカ〈anokay-ne-yakka||今ここ石狩にいる)我々みんな―であつ―ても〉。「チシバツクノ。ヲシコルアンコロカ」||我々は)号泣するばかりに我々は彼を哀悼したけれども。チシバツクノ、オシコルアンコロカ、〈cis-(an)-bakno←pakno-oskor-an-korka||号泣する(2―我々が1)―ばかりに―彼を哀悼した2―我々は1―のだが〉。正しくは、アノシコル〈an-oskor||我々が―(彼を)哀悼する〉。オシコル〈oskor||後を

―持つ―心残りである、後を引いている、影を引く、故人を惜しく思う、故人を残念がる、他動詞

(18) (いたしかたなし。たむけのさけ、そうしきのせつ)

(19) (エ子ガルカエシヤマ。アンノミトノト。イワクテヲツタ)「エ子ガルカエシヤマ」||それ(以上に対し、我々は)どうすることも(でき)なくて。エネガルカイシヤマ <ene(an)-gar-+kar-ka-isyam+isam-(w)a>||どう(我々が)―為すの―も―ない―ので。|「アンノミトノト」||我々が(死者を)祀るお神酒(で)。アンノミトノト <an-nomi-tonoto>||我々が―祈る―お酒。|「イワクテヲツタ」||彼を送る際に。イワクテオッタ <(an)-iwake-otta>||貴方が、人が―彼を(先祖のもとに)送り帰ら―せる―その時に

(20) (にゆうようのしな、つかわすによつて、さつそくに、わるきいみごと)

(21) (ユワンケグニプ。サンケクシユ。ヲロトナシノ。ウエンシリキ)「ユワンケグニプ。サンケクシユ」||使用すべきものを、運上屋から差し出すので。イワンケグニプ、サンケクシユ <(an-e)iwanke-guni+ kuni-p-(an)-sanke-kusyu+ kusu>||貴方が、人が)使う―べきはずの―物を―(我々が)―差し出す―ので。|「ヲロトナシノ。ウエンシリキ」||そこで早急に、凶事の状態を。オロトウナシノ、ウエンシリキ||<oro-tunasno-wen-siriki>||その所―より早く―悪い―有様を

(22) (しまうようにいたすべし)

(23) (ヲケレグニフタバanna)「ヲケレグニフタバanna」||貴方は対処し)終了されるように願います。オケレグニフタバanna <(an)-okere-guni+ kuni-p-tab+tap-an-na>||貴方は)終了―させる―べき―事は―かく―あるのです―ぞ

(24) (みぎのごとく、うんじょうやにおいて、しいにん、つうじのきくところ)「古登く」||如く。

(25) (にて、つうじのおしえをもちいず、サルよりきたりし)

(26) (おつてなへ、もうしわたしたいすことあり。そのち、つうじようむきの)「い多し春」||「し」の下部へ白亜を塗り、そこへ「春」を書く。

【038】

(1) (せきに、せんじつのサルのおつてなへ、こうでんつかわしもうしわたしは、だれより)「サロル」||「ロ」の上に「ル」を重ね書きしている。

- (2) (ききそうろうやと、たずねしゆえ、ありのまま、もめんいったんつかわし)「尋す由へ」〓尋ねし故。
- (3) (おんなどじんよりききしよし、もうしければ、ひとことのえぞことばならう)「申介れ者」〓申したところ。
- (4) (に、いったんのもめんをおしまずそうろうだん、きもちのよしにて)「氣持の与し」〓氣持ちが良い。
- (5) (ちようばより、そもめんにとりよせ、しゅうぎとしてもらう)。「悦儀として」〓祝儀として。
- (6) (こののちに、ばしよのようをも、つとむべきものなりと)「天字り□尻」〓テウリ・ヤギシリ、手売・焼尻、「天字り□尻」の上へ白垂を塗り、濃墨で「この後に」と重ね書きをしている。手売・焼尻は、文久2年、紋部津へ出稼ぎに出向いた際に目にしたはずだが、そこで起こった何かを引用したかったのもあつたらうか？
- (7) (ほめられ、こののちも、いよいよはげむべしと、もうされし)「嚴む」〓励む。「もふ左れし」〓申されし。
- (8) (ことあり。わずかにこうでんというふたもじをきくに)「二字」〓にじ、とも読めるが、ここでは、ふたもじとした。
- (9) (あたまへぎずつけられ、ちをながし、ふようのことばを)
- (10) (きき、いったんのもめんをつかわして、わずかのことばをきく)
- (11) (このしよには、ひやくせんのものな、または、ことばもあつめ)「古の書」〓番人圓吉蝦夷記 全。「の」は、脇に添え書きしているようにみえるが、筆が同じことから、書き忘れたものと思われる。
- (12) (かきおくなり。あたまより、ちをとるにもあらず。また)
- (13) (もめんのれいを、のぞむにもあらず。たにんは、みぬと)
- (14) (ても、いたしかたなし。わがしんぞく、しそのなか、えぞち)「至方奈し」〓致し方なし。「子孫盤の中」〓「盤」の上に濃墨で、「の中」と重ね書きをしている。
- (15) (かせぎいたすものは、つとめのまあい、ながよのせつ、または)「長夜」〓ちようや。(1) 長い夜、(2) 墓の中、埋葬、(3) 一晚中、夜もすがら、ながよ、ちようや、じようや、長くて夜が明けるのが遅い夜、多くは秋または冬の夜をいう。
- (16) (しろうがつやすみなどのせつは、そとあそびよりも、これをひけんす)「披見」〓文書などを開いて読む、書籍に目を通す。
- (17) (べし。ひとりよくあるものは、うつしとり、かんすうにもならば)「筆力有」〓筆の力のある。文字の読み書きを自由にする、文才がある。

- (18) (めいどにあるとも、なにほどかうれしからんか)「冥途」|| 冥土、死者の靈魂が迷い歩く道、冥界(みようかい)、黄泉(よみ)、黄泉路(よみじ)。「何程か」|| いかほどか、どれくらいか、どれほどか。「うれしか良ん」|| 嬉かるらん。
- (19) (このほかに、ながきつとめちゆうに、けんぶんいたし、あとあとへおしえ) 句頭の墨による「○」印は、030-6を参照されたい。「見聞」|| みきき、とも読めるが、けんぶんとした。見たり、聞いたりして得た知識・経験。「跡リへ教ひ」|| 後々へ教え。
- (20) (のこしたきことも、まま、これあり、といえども、しすう)
- (21) (になるゆえ、まず、あらましをかきおくものなり)「由ひ」|| 故。
- (22) (えぞじんのことば、くわしきことは、ひがしえぞちは)「東蝦夷地」|| 北海道の太平洋沿岸の地区、および南千島を含む地域。

【039】

- (1) (ユウフツ、サル、シツナイ、クスリ、トカチへん、やまおくに)「ユウフツ」|| 苫小牧市勇払。「サル」|| 沙流郡。「シツナイ」|| 新ひだか町静内。「クスリ」|| 釧路市。「トカチ」|| 十勝。
- (2) (すみおる、えぞじんあるところ、かわかみ、やまおくへ、すうど、おつねんい)「数度」|| 「数」の偏は、ソの下に才偏、旁は夕を書いている。なお、同じ文は、015-110にも見える。
- (3) (たしばんにんにあらざれば、じつのくわしきことは)「実の」|| 実際の、真実の、真の。
- (4) (おぼえがたかるべし。おくえぞちにも、わじん)「覚ひか多かる」|| 覚え難かるべし。
- (5) (のおおくはいりこみしばしよは、えぞじんもわじんふうになり)「場処」|| 盤「も」の上に、濃い墨で「盤」を重ねて書いてある。
- (6) (それゆえ、ことばもわじんことばおおく、わじんも、また、えぞ)「楚れ由へ」|| それ故。「蝦夷人」|| 「夷」の下部へ重ねて「人」を重ねてあるが、見にくいので、改行して、「人」から文章を書いている。
- (7) (じんのことば、おぼえがたし。とうじは、うえはらくまじろう)「覚ひか多し」|| 覚え難し、覚えにくい。
- (8) (さとうぜんべえ、にしだへえべえ、あだちたろうべえ、すぎのや)
- (9) (へいはち、ひろせさんうえもん、とみうちきたえもん、などのように)「やう丹」|| 様に。
- (10) (えぞことばにくわしきつうじもなし。ひろせさんうえもん)

(11) (などは、ぶんかねんちゆうに、よつかよや、しょくじをとめ、しろさ)「文化年中」||文化元(14年)||1804(1817年。

(12) (とうをたもとへいれて、これをかくしくい、えぞじんの)「たも登」||袂、和服の袖。「隠し食」||隠し食い。

(13) (つかれをまつて、かちをとる。このせつのつうじは、めしは)

(14) (さておき、いちにちさけをのまざれば、そのひをすごしが)「か多し」||難し。くしくい。

(15) (たし。それにじゅんずるえぞじんも、よつかはさておき)「じゅんず天」||順ずる、準ずる、准ずる。「天」を指先に唾を付けて擦り

取り、その上へ濃い墨で「る」を重ね書きしている。「四日盤」||盤は、細筆で脇に書き添えてある。

(16) (はんときのおうたいいたすものもなし。なにごともしげにて)「半時」||一時(いつとき)の半分、約1時間、現行の時間では30分。

「應對い多し者」||應對致す者。

(17) (すますじせつなり。とうじのえぞじんは、わじんよりもわじん)「済し時節」||済ます時節。

(18) (ことばにくわしきものもあるなり。つうじもいらざるよう)

(19) (におもえども、さにもあらず。ネムロ、シベツのオ)「左丹も阿良じ」||そうでもない。「子モロ」||根室市。「シベツ」||標津町。

(20) (ムシヤをみるに、やくどじんども、はおり、はかまにており、かみは)

【040】

(1) (わじんふうにゆえども、つうじのつうべんは、やはり)「結ひ登も」||結えども、結っているけれども、結んでいるけれども。

(2) (えぞことばなり。いわんや、モンベツあたりは、いまだ、き)「い王んや」||況や、まして。「モンベツ」||紋別市。「帰俗土人」||名前を

和名に、髪容を丁髷(ちよんまげ)に結い、外装も和人風に申請した蝦夷人。

(3) (ぞくどじん、ろくしちにんに、すぎざるとちなり。さすれば)

(4) (つうべんは、もちろん、えぞことばをもちゆ。また、たいへいの)「太平」||泰平、世の中が穏やかなこと。

(5) (みよに、ぶをはげむということもあれば、おほえおくほどの)「御世」||天皇の治世時代。「嚴と登いふ事」||励むという事。

(6) (ことはあるべからず。えぞちかせぎのひとには、こころえ)

(7) (あらせたきものなり。いらざることにふでを)「い良左る事丹」||要らざる事に、不要な事に。

- (8) (ついやし、これをりやくしおわりぬ)「略すお王んぬ」略し終わりぬ、省略して終わります。
- (9) (かどまつも、しちごさんも、かざらぬどじんやも)
- (10) (しょうがつきたるか、おきなみえけり)
- (11) (モンベツばんにん、それがし) 和人は、床の間に正月の縁起物である長寿の翁媪の軸を掛け下げて新年を祝う。蝦夷地では、そうした年中行事は全く見当たらないが、季節が廻った所へ、どこからか長老のアイヌ老人が丁度折りよくやって来た。「モンベツ番人某」極細の筆で書かれている。
- (12) (シユクハモ、チユクトノホツモ、エラムシカレ、コロカ)「シユクハモ」彼の生きた年も。シユクフパ〈syukup-pa 成長する、生きる一年〉も。「チユクトノホツモ」月、太陽を迎えたのも。(クンネ) チユフ、トーノ (チユフ)、ホク〈(kume)-cup-tono-(cup)-hok 夜のー) 恒星(月)ー昼の(ー)恒星(太陽)ーを迎える(の)も。「エラムシカレ、コロカ」彼はわからないけれど。エラムシカレコロカ〈eramuskare-korka 彼は知らないが〉
- (13) (わがとしも、つきひのかずも、しらねども)
- (14) (タネア、アナカエネトハケ、チャチャ子アン)「タネア、アナカエネトハケ、チャチャ子アン」今は、わが身も、翁となる。タネ、アノカイ、ネトパケ、チャチャネアン〈tane-anokay-netopake-caca-ne-an 現在はー(この) 私のー体もー老体ーとなーった〉。
- (15) (いまはわがみも、おきなどぞなる)
- (16) (モンベツそうおつてな、ヘエシヨク)「ヘエシヨク」ヘエンヨク(モンベツ惣乙名)は、「惣乙名サントアイノ、辰(安政3 1854年当時) 八十三才(安政5年4月6日病死)、倅ヘイシユック、三十才、妻トシメ、三十才、髪、次男、エヘサンケ、二十二才(この年、宗谷へ出稼ぎ、巳閏五月、於ソウヤ病死)、倅の惣領、髪、アヘキチ、十二才(明治9年の戸籍簿で吉野愛吉)、メ男四人、女一人(秋葉実翻刻編『松浦武四郎選集』別巻、2008年、261頁)に見える人物で、武四郎が「東西蝦夷山川地理」の取調べに協力した人名簿である「案内土人、併、地名取調土人名簿」(首巻凡例)に「連上屋元、酋長ペイシユク」の名が記されている。「モンベツ」
「モンベツ」以下は、細筆で書いてある。「惣乙名」そうおつてな、そうおとな、幾人かいる乙名の代表。なお、040-12-16までの片仮名は、細筆で書いてある。